昊仰ぐ刻　君の蒼い翼

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
昊仰ぐ刻　君の蒼い翼

【Ｎコード】
Ｎ０２４８Ｗ

【作者名】
海土龍

【あらすじ】
幼い頃、天高く手を伸ばせば、白い雲も太陽も、天上に在るすべてのものを、手に入れられると信じていた。ただ今は幼いから、天まで手を伸ばすことができないだけだ、と。時は乱世。己の血統の低さと戦う男と、皇子して生まれながら男として生きることを許されない少年の、ＢＬ気味、中華風ファンタジー。
※『蒼い翼』（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２８７７ｊ／）改正版です。
字をやめ、何人かの登場人物の名前を変更し、より読みやすい内

容を試みています。

始まりの刻　仰ぎ見る蒼（前書き）

※『蒼い翼』（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２８７７ｊ／）改正版です。
字をやめ、何人かの登場人物の名前を変更し、より読みやすい内容を試みています。

始まりの刻　仰ぎ見る蒼

幼い頃。
天高く手を伸ばせば、白い雲も太陽も、天上に在るすべてのものを手に入れられると信じていた。
ただ、今は幼いから、天まで手を伸ばすことができないだけだ、と。
そう思っていた。

両腕を伸ばす。
手のひらを目一杯に広げて、高く高く。
掴み取れるだけ、掴み取ってやるのだ。

仰ぎ見た空は、蒼い。
この蒼だけを見上げて生きてきた。
今はまだちっぽけな自分だけど、いつの日か必ず、この蒼の中に飛び込んでいくのだと。
そう信じている。

幼き刻　血が告げたもの　　壱

額に痛みが走った。
痛みは次第に熱を帯び、つうー、と血を伝わせる。
小石が石畳の上を弾みながら去っていく。
少年は血走った眼で、石を自分の額に投げつけた相手を睨み上げた。

「なんだ、その眼は。気に入らねぇ！」
「生意気な奴だ」
「宦官の孫のくせに！」

――腐った血が流れている穢れた野郎め！

耳障りな言葉が大気に響く。少年は下唇を噛み締めた。
ドクドクと額が脈打つ。熱い。燃えるようだ。
あまりの怒りに目眩を感じ、瞳を閉ざせば、皮膚を焦がすような血が額から左目へと伝い、更に頬を、顎を伝って胸元に落ちる。
麹塵色の袍が、じわりと赤く滲んでいった。
歯を噛み締めた。どんなに悔しかろうと、そうして耐えるしかない。

少年は己よりも年上の少年達数人に取り囲まれていた。
こういう事は度々あることだった。
なぜなら、この世は、少年の想像を絶する愚か者で溢れているからだ。
愚かな彼らにとって、少年は無条件に気に喰わない存在であるらしい。
その理由は至って単純なものだ。少年の祖父が宦官だからだ。

この少年の名を、緋鶯（ひおう）といった。姓は蘇である。
彼の祖父は、都では幼い子供でも知っている通り、宦官だ。
これは緋鶯にとって、どうすることもできない事実である。
祖父は権力を手に入れるために己の性器を切り落としたのだ。

そもそも蘇家は、青帝国の人ではない。
帝国の南東に位置する小国――ユオ国の出身だ。
ユオ国が滅亡した折に、帝国に移り住んできた商人の末裔が蘇家であった。

しかし、青帝国を世界の中心とする、この世は、血統を尊ぶ時代である。

学があれば、そこそこの地方官になることができるだろう。
人脈があれば、そこそこの国官になることができるだろう。
財があれば、そこそこの地位を得ることくらい、できるかもしれない。
だが、『そこそこ』から脱するためには、血統、つまり家柄が重視されていた。

こうした世の中が、亡国の出身である蘇家の者にとって、生き易い場所であるはずがない。
商人として生き、商売を行うだけでも、よそ者だと蔑まれ、対等な取引をするさえできなかった。

そんな中、緋鶯の祖父は、商人で生を終えるには大きすぎる野心を持ってしまう。
幼い頃から秀才だと周囲の者たちに褒めそやされていたことが、

彼の胸に野心を植え付けてしまったのだ。

彼には学があった。人脈も、少しだが、あった。
金は、商家であったため、どうにか用意することができた。
だが、ひとつだけ彼にはどうしても手に入れられないものがある。
高貴な血だ。

彼には、もはや自らの性器を切り落とすしか術がなかった。

己の性器を切り落とした者――宦官は、女しか入ることのできない後宮で自由が利く。
そのため、皇帝や皇后、未来の皇帝や皇后に取り入る機会に恵まれた。
皇族さえ抱え込んでしまえば、金も地位も、権力も、思うがままだ。
人当たりの良い祖父は胡帝に気に入られ、彼の皇子で後の礎帝の教育係を任されることになった。
そして、礎帝にとって、師であり、　親のような存在だと思われるような地位を得たのである。

だが、どれほどの権力を手に入れても、宦官である以上、子に財を残すことができない。
自分一人で遊び切れない程の財を譲るために、親戚筋に当たる薪家から養子をとった。
それが緋鶯の父である。

緋鶯の父は、祖父が溜め込んだ財で青帝国の官位を買い、邸を買い、人を雇い、まるで数代も前から帝国の貴族であったかのように振る舞った。

そんな父のおかげで、緋鶯も、幼い時こそは何不自由もなく育つことができた。
高い塀に囲まれた、広い庭のある大きな邸の中の世界ならば、財があるということだけで、何ひとつ不自由しなかったからである。
だが、緋鶯は成長するにつれて、そのような箱庭の世界には満足できなくなった。
度々街へと遊び出るようになって、彼は思い知る。
宦官というのは、本来、自分の子孫を残せない存在。
だからこそ、莫大な財や地位を得る。
それらは、子の代わりなのだ。

――ならば、父は何だろう？　自分の存在は何だろう？

あってはならない存在なのではないだろうか。
どんなに高官の地位を金で買おうと、どんなに広く立派な邸で暮らそうと、祖先の血は変えられない。
それを醜くも覆い隠そうとしている蘇家を、人々はどんなにか蔑んでいることだろうか。
幼い緋鶯は、ぞっと身が竦む思いがした。

実際、街で擦れ違う人々が緋鶯に向ける視線は、冷ややかなものだった。
同世代の少年たちは、誰ひとりとして、緋鶯と共に遊ぼうとしなかった。
彼らは皆一様に、緋鶯を穢れ者のような目で見つめてくるのだ。

――腐った血。

ポツリと呟かれた、その言葉を初めて聞いたのはいつだっただろうか？
もはや、彼は覚えてはいない。
だが、そうと言われる度に、負けてなるものかという野心が燃え上がったこと、それだけは大人になった後でも忘れられなかった。

鈍い音が響く。緋鶯は腹を抱えてうずくまった。
蹴られたのだ。そうと気付いてからも、すぐには、そうされたことが信じられなかった。
鈍く痛む腹を片手で押さえつけながら、相手を睨み付ける。
すると再び、生意気だと言われて、顔を殴られた。

唇が切れる。
血が滲んだ。
背を蹴られ、地に伏せる。
脇腹を蹴られ、転がされた。

仰向けにされた時、ふと瞼を開いた。

蒼。

――立ち並ぶ家々の屋根の遙か上方に蒼があった。

空か、と緋鶯は吐く。
憎らしいほど澄んだ蒼い空。
腐っていると言われる自分を蔑み、見下しているかのような空だった。

「何をしている？」

不意に、威厳に満ちた声が響く。少年にしては低く、太い声だ。
緋鶯を取り囲んでいた少年たちは、その一言だけで、慌てふためき、我先にと逃げていった。
取り残された緋鶯は身動き取れず、じっと黙って、歩み寄ってくる相手を待つ。
彼は石畳の上に転がる緋鶯の元に来ると、その脇にしゃがみ込んだ。

「大丈夫か？」

彼が腕を引くので、緋鶯は上体を起こした。
年上だろうか。幼馴染である従兄よりは年下だろう。
では、自分より二つか三つ上といったところだ。
恰幅も、身形も良く、一目で名家の者だと分かった。
彼は緋鶯を立たせると、腕を組み、自分より背の低い緋鶯に合わせるかのように、僅かに上体を屈めた。

「ひどい怪我だ。わたしの家がこの近くにある。来てくれれば、手当くらいしてやるぞ」
「いらない。俺の家もすぐ近くだ」
「ほう。お前、どこの者だ？」
「名を訊く時は、自分から名乗るものだろう？」
「名を訊いた覚えはない。家名を訊いたのだ」

「同じことではないか」

腹が立った。
この者にとって、人とは、その人自身よりも、その人物の背景にあるものの方が大事なのだ。
そう言われたような気がした。
背景。――要するに、血統だ。
緋鶯は眼を細めた。氷のように冷ややかで、鋭い視線を相手に向ける。

「姓は蘇だ」
「蘇内侍の縁者か？」
「孫だ」

緋鶯は苛立ちを覚えながら、言葉少なく答えた。
だが、そんな緋鶯の態度を、名家の御曹司らしいその少年は気にする様子もなく、ふーん、と鼻を鳴らす。

「なるほど、孫か。わたしは瓊家の者だ。奔帷（ほんい）という」
「瓊家の……」

瓊家と言えば、四代に渡って三公を輩出した、青帝国きっての名家で知られる。
だからこそのこの振る舞いなのか。緋鶯は納得し、表情を歪めた。
奔帷の態度は、実に自信に溢れ、まるで己が王であるかのようだ。

「ここでわたしと知り合えたことは、お前にとって幸運だった。これからは、先程のような目に遭った時、わたしの名を出せば良い。わたしの家来に手を出す愚か者はいまいからな」
「家来だと？」
「そう思わせておけ。その方がいろいろと得をするぞ」

唾を吐きたかった。
だが、耐えた。
奔帷は己が何を言っているのか分かっていないのだ。

――なんという傲慢。

緋鶯はわなわなと全身を振るわせた。そうとも気付かずに奔帷は続ける。

「助けてやると言っているのだ。お前の眼の輝きは生意気だが、なかなか見どころがある。そのうち、わたしの右腕になれるかもしれんぞ。確かに、お前の生まれは良いとは言えんが、わたしの側にいれば、それしきのこと、いくらでもわたしがどうとでもしてやろう」
「……」
「どうだ？」

奔帷は背筋を伸ばし、自信に満たされた笑顔を浮かべながら、緋鶯に向かって手を差し伸べてきた。
緋鶯はその手と彼の顔を交互に見やる。

悩んでいたわけではない。ただ、奔帷の言葉が信じられなかったのだ。
それは、信頼できないという意味ではない。心底、耳を疑っていた。
震える己の腕を、もう片方の手で押さ付けた。

「わたしの側にいれば、宦官の孫だろうと、こんな風に虐められることはなくなるぞ。あいつらを見返してやることもできる」
「お前の家の権威を笠に着て……か？」
「わたしはああいうことが嫌いなのだ。ああいう、弱い者虐めというものが」
「弱い者？」

ゾッ、と肌が粟立った。

――何を言われた？

再び、耳を疑う。

――弱い者？　誰が？　俺が？

カッ、と頭に血が上った。見る見るうちに顔が赤く染まる。
我に返った時にはすでに激しく音を鳴らして、奔帷の手をうち払っていた。
血走った眼を彼に向ける。

「俺は絶対にお前の下には付かん！」

奔帷は嗤った。
年下の餓鬼の言う事など、戯れ言としか思っていない様子である。
緋鶯は腹立った。心底、怒りが湧いてきて、ぐるぐると胸の内で渦巻く。
怒鳴り散らしてやりたかった。
だが、おそらく奔帷は嗤うだけだろう。
彼は格下の緋鶯の言うことなど、少しも本気にしていなかったのだ。
やり場のない怒りは、どす黒く胸に溜まっていく。
吐き気がする。
目眩がする。
頭が痛い。
息苦しい。
緋鶯は堪えるように、ぐっと固く瞼を閉ざした。

瓊奔帷。
――瓊家に生まれてきた。ただそれだけの男だ。
偶々、瓊家に生まれ落ちただけの男。
なぜ、それしきの男の下に付かねばならんのか。
腑に落ちないことばかりが、この世では多くまかり通っている。

そんな気がしてならない。

１０歳の時、１３歳の奔帷と出会い、それ以来、彼は何かと付けて緋鶯に話しかけてくるようになった。

いらぬ、と言っても、彼は緋鶯が遠慮しているのだと思っているようで、他の少年たちに絡まれていると知ると、すぐさま駆け付けてきた。

弱い者を助けることで、優越感に浸りたいのだ。

自分は良い事をしている、弱い奴を庇っているのだと、自己満足したいのだろう。

――迷惑だった。

彼が優越感に浸るほど、劣等感が緋鶯の胸を苛んでいく。

悔しい。

だが、この悔しささえ奔帷には通じない。

行き場のない憎しみが、黒く黒く変色して、緋鶯の胸を犯していった。

幼き刻　血が告げたもの　　弐

▲▽

ふと、瞼を開いた。

眼に突き刺さってくる日射しを感じて、僅かに上体を起こした。

頭が重い。どうやら寝過ごしたようである。

緋鶯が目覚めたと察すると、女が一人寝室に入ってきた。

主の身支度を整えようとする女に向かって、緋鶯は片手を振る。

「後で良い。汐銚（せきちょう）を呼べ」

女は黙って頷き、寝室を出ていった。

しばらくあって、厳つい顔が現れた。５つ年上の従兄――汐銚だ。

姓を薪（しん）という。

彼は昼過ぎても尚、臥牀に腰掛けている緋鶯を見やり、眉間に皺を寄せた。

「緋鶯。人を呼ぶ時は、せめて身支度を終えてからにするものだぞ」

この従兄と緋鶯は主従関係にあり、緋鶯が主であるのだが、彼には緋鶯に対して小言を言う権限を許していた。
祖父も父も亡い今、自分を戒めてくれる者が一人くらいあっても良いように思ったからだ。
緋鶯は自分を諭そうとする従兄に、恨めしげな眼を向けた。

「汐銚、不快な夢を見た」
「夢だと？」
「実に、忌々しい夢だった」
「それで？」

彼は臥牀の足下に腰を下ろし、緋鶯を見やった。
悪夢如きで自分は呼び付けられたのかと、呆れ顔をする。緋鶯は笑った。

「幼い頃、お前はいつも俺を助けに駆け付けてきてくれたが、一度だけ助けに来てくれなかったことがある。その一度で、俺はとんでもない思いをしたのだぞ。未だに夢に見てしまう程だ」
「そいつはすまないことをした。その話をお前から聞かされる度に、過去に戻って助けてやりたいとは思うが、さすがの俺もどうすることもできん。ならば、せめて、お前の夢に飛び込んで、助けに行ってやりたいとも思うが、夢の中のこと。どうにもならん」

諦めてくれ、と汐銚も笑った。
緋鶯は眼を細め、今更どうすることもできないことで彼をなじるのをやめ、話題を変えた。

「昨日、冱斡(ごかん)の地から文が届いた」
「冱斡？　では、例のあの返事か？」
「そうだ」
「そうか。それで？」

膝を打ち、汐銚は身を乗り出す。
緋鶯は薄く笑って小卓に手を伸ばすと、文箱を取り、中から文を取り出した。
読め、と短く言って、汐銚に差し出す。
汐銚はすぐさま文面に目を通すと、髭を蓄えた顎に片手を添え、低く唸った。

「お前を試しているようだな」
「そう思うか」
「もっとも、冱斡公にしてみれば、これくらい当然のことなのかもしれないがな」

汐銚は読み終えた文を、その無骨な手で丁寧に折ると、緋鶯に返す。
再び手のうちに戻ってきた文の文字に視線を流し、緋鶯は遠く冱斡に思いを馳せた。

冱斡は、青帝国の北西に位置する土地だ。
その地を治めている者は、王族のひとりで、その役目上、冱斡公と呼ばれる。

緋鶯は数年も前から、冱斡公に文を送り続けていた。
冱斡公――蒼昏貞（そうこんてい）は、先の皇帝の長子である。
一時は皇太子の座にいた昏貞が、なぜ王宮ではなく、冱斡という片田舎を治めているのか、その理由は複雑なものだ。
故に、それは後に語ることにする。
ともあれ、昏貞には娘がいて、緋鶯はその娘を娶りたいと申し出ていたのである。

緋鶯にはどうしても高貴な血が必要だった。
青帝国に陰りが見え始めたのは、かれこれ数十年前からだ。
それはゆっくりゆっくりと、布地に墨が染み入るように国を犯し始め、誰もが気が付いた時には既に誰にもどうすることもできなくなっていた。

そして、乱世が幕を上げる。

名ばかりの無力な皇帝と、皇帝を利用し権力を得ようとする外戚と宦官たちが都を狂わせた。
飢えた民が日々死んでいく。華やかなはずの王宮でも、移りげな権力のせいで、処刑場が血で濡れない日はないという。
そして、各地では豪族が力を蓄え始めている。
瓊奔帷や蘇緋鶯も例外ではなく、共に狂った都を脱出した後、奔帷は渕州で、緋鶯は彼の郷里の琲州霖谷で、力を蓄えていた。
力。――それは人だ。
軍略に長けている者、武術に長けている者、策略に長けている者、これらの人々は当然のこと。
鉄を打てる者、荒地を開墾し農地を耕す者、商いをし市を開ける者。
一見すると、乱世とは何ら関わりが無さそうな者こそ『力』であ

ったりするものだ。

しかし、人は高貴な血に惹かれる。
瓊家が名門だというだけで、緋鶯ではなく、奔帷ならば世を変えてくれそうだと、人は思う。
名門の生まれだというだけで、人は、その者の力を信じてしまうものなのだ。
故に、出自が卑しい緋鶯が天下に号令を発しても、誰も耳を貸さないだろうことは目に見えていた。

血がこれほどまで強いのか、と思った。
緋鶯の言葉では誰もが耳を貸してくれない。

――高貴な血。

そんなもの、と思う。
だが、それは、自身の内にないからこそ思うのかもしれない。

持っていれば損をしない。
わずかだが、天に近くなる。
その程度のものなのだろうと思う。

それでも、今の自分には必要なものであった。
――故に、昏貞の娘なのだ。
青帝国で最も高貴だと尊ばれる蒼皇家の血が流れた娘を、緋鶯は妻に望み、その血を己の力として取り込もうと考えた。

そして、昏貞からの文である。
彼からの返事は、是とも、否とも判断がつきにくいものだった。
ただ、分かることは、緋鶯を試しているであろうことだ。

「娘を娶りたくば、直々に貰いに来い……か」
「お前が瓊奔帷をどう思っているのか見たいのだろう。冱斡は渕州の一部だ。そして、奔帷は今や渕州のほとんどを支配下においている」
「奔帷の兵は１０万に達したとか。多くの将が彼に下ったようだな」
「お前も瓊奔帷に下るつもりなのか、または、戦う意志があるのかどうか、冱斡公は見定めるつもりだろう」

うむ、と緋鶯は唸った。

おそらく昏貞は、誰かの部将になる程度の男に娘を嫁がせたりはしないだろう。
奔帷の部下となり、平然と冱斡にやってくるような男ならば不要。
そうかと言え、奔帷を恐れ、渕州に足を踏み入れられないような男ならば問題外といったところか。

「今はまだ、はっきりと奔帷と敵対しているわけではないが、お前に下るつもりがない限り、敵地に踏み込むようなものだ。危険極まりないことだな」
「それでも行かねばなるまい」

緋鶯は従兄を見やって、悪戯っぽく笑みを浮かべた。

「付き合ってくれるか？　俺の嫁取りに」
「お前の嫁取りのために、危地について来いと？」

「俺ひとりで行けば、死んでしまうかもしれん」
「それは困るな。後々、俺が死んだ時に、あの世でお前の不平不満が止まらなくなりそうだ」
「ならば、共に来い」

からからと笑って、緋鶯は従兄の肩を一回だけ強く叩く。
すると、汐銚は大げさに痛がって見せてから、それで？　と言葉を紡ぐ。すぐさま緋鶯は笑みを消し、真顔に戻った。
緋鶯は、この従兄に対して、隠し事が得意ではない。
常に従兄に対して、言うべき事と言う必要のない事を併せ持っていたが、従兄はそれら大半を、緋鶯の口から聞かずとも承知しているようであった。
彼曰く、眼の動きだけで分かるのだ、と。
今回は得てして隠そうとしていたわけではなかったが、おそらく、今朝の夢見が悪かったせいだ。
表情に胸を渦巻く感情が出てしまっていたのだろう。無性に奔帷の顔が脳裏にちらつく。

「あの男が、俺の思っている通りの男であれば、近々使者が来るな。書状を携えて」
「そうだな。来るだろうな」

書状には、このように書かれているはずだ。

――斉郡の叛乱を鎮圧したい。兵を率いて来てくれ。

読む前、いや、そのような書状が届く前から、奔帷の考えが手に

取るように分かった。
渕州の内に斉郡という地がある。
渕州は奔帷の支配下であるが、その支配は未だ完全ではないのだろう。斉郡で叛乱が起きていた。
そして、奔帷は乱鎮圧を斉郡の太守に命じたが、その者が無能なのか、少しも治まる気配はない。

「敵か、味方か。配下になるのか否か、そろそろはっきりとしろと言ってくるだろう」
「お前は常に言っていたのだがな。なかなか伝わらなくて苦労をした」
「まったくだ」

緋鶯は苦笑を漏らした。
奔帷の下に付く日など、来るわけがなかった。

従うのか否かと問われれば、即答してやろう。否だ！
なぜ、もっと早くに問わなかったのだ、と罵ってやりたい。
幼い頃から答えは決まっていたのだ。
例え、命落とすようなことになっても、お前の下には付かない、と。

「俺はいつか、あの男の上をいく。その為の血を手に入れる。あの男の血に対抗できるだけの血を。そして、いつか、どちらも切り捨ててやる。あの男の血も、あの男に匹敵するような血も、すべて根絶やしにしてやる。――高貴な血？　そんなもの無用だ。血は血。

万人が皆、赤い。高貴でも、腐ってもいない。皆、同じ血だ。――
そうだろう？」

そうだな、と従兄が微笑む。
厳つい顔だ。だが、その顔が笑うと、ホッとする。
とても安心するのだ。

その安堵感を得たくて、幼い頃、よく彼を昼夜問わず呼び付けたものだ。
そして、それは今も大して変わっていない。
臥牀の足下に腰を下ろしている汐銚を見やり、緋鶯は、ふっと眼を細めた。

出会いの刻　矢を放つ　壱

青帝国は４００年続く大帝国である。
帝国が４００年も保たれた理由はさまざまあるが、そのひとつに、純血制度が理由として上げられる。
青帝国は血統を何よりも重視した。
皇族のうちに、特に両親共に皇族である者を「青純血」と呼び、この者たちにしか玉座に着くことを許されなかった。
それ故、無用な帝位継承争いが起こらなかったのである。

ところが、時は下り、青純血は極めて数を減らし、代わって「真血」と呼ばれる片親のみ皇族である者たちが力を持ってきた。
彼らは母方の親族――外戚の力を借りて、権力のより深く、真髄を握り始めたのである。

時は、胡帝の時代。
胡帝の長子、昏貞（こんてい）皇子が廃太子となった。
その理由は、胡帝に対する反逆であったが、その罪に対して刑は軽く、廃位された後に渕州冱斡（えんしゅうごかん）の地に封ぜられた。
斬首でも、薬殺刑でも、流刑でもなく、片田舎ではあるが、太守としての地位を与えられたのだ。
じつに、胡帝の昏貞への想いが察せられる処置だ。

胡帝は昏貞の反逆など、まったく信じていなかった。事実、それは胡帝の妾妃のでっち上げであり、そうであろうことは、周知の事であった。
それでも誰もが口を閉ざし、皇太子を左遷したのは、胡帝の妾妃――媚搖（びよう）の力が強大過ぎたからだ。

恙(よう)媚搖は、下級貴族の娘だ。
その美貌が欲深い宦官の目に留まり、その宦官の力で後宮に上がった。
宦官の目は確かだったのだろう。媚搖はたちまち胡帝に愛され、貴嬪の位を得、やがて皇子を生んだ。
すると、彼女の生家は朝廷での地位を得、次々に出世していき、彼女を後宮に上げた宦官も後宮での実権を握った。
昏貞皇太子の不幸は、こうして始まった。

まず、生母である皇后が媚搖の陰謀で廃妃となってしまう。
代わって媚搖が皇后の座に着き、王宮はすっかり、媚搖の皇子を擁する媚搖一派が跋扈するようになった。

しかし、ここで媚搖派にとって、ひとつの問題が生じる。
媚搖が生んだ皇子が青純血ではないことだ。
青帝国が長く守ってきた純血制度が彼女の前に大きな壁として立ちふさがったのだ。

この時、媚搖は眉間に深く皺を刻み込み、しばし考えた後に、次のように言ったという。

「青純血の皇子でなければ、帝位を継げない？　では、青純血の皇子が唯ひとりもいなくなってしまったら、青帝国の玉座はどうなってしまうのかしら？」

これを聞いた媚搖派の重臣や宦官たちの毒牙が、青純血の皇子たちに向けられたことは言うまでもない。

青純血の皇子がいなくなってしまえば、真血の皇子が帝位を継ぐしかなくなるからだ。
媚搖を恐れた青純血は次々と都を逃げ出した。だが、皇太子である昏貞まで逃げ出すわけにはいかない。
最後まで媚搖派の者たちと争ったが、胡帝に対する反逆の罪を被されてしまったのである。

廃太子となった昏貞が与えられた土地は、冱斡といい、渕州の内にある。
渕州は都の遙か北西に位置する片田舎だ。
このような地に流されてしまったことを昏貞は深く嘆いたが、月日が過ぎると、別の考えを抱くようになった。
それは、胡帝崩御の知らせが昏貞の耳に届いた時のことだ。
突然すぎる皇帝の死は、いくつもの謎が隠されていたが、侍医たちはそろって死因は持病の悪化だと言い張った。
だが、誰もが真実を口にできないだけで、毒殺であることは皇帝の躯を見れば明確である。
犯人は媚搖。証拠はない。だが、一刻も早く己の皇子を帝位に着けたいと企み、そのために皇帝を暗殺するくらいやりそうな女だった。
皇帝すら殺す女が、昏貞を殺すことに躊躇いを感じるだろうか。
昏貞はようやく胡帝の親心を知ることになったのだ。
媚搖から逃がすために自分を冱斡へと向かわせたのかもしれない、と。

△▼

「お待ちください！」

冱斡城に侍女たちの甲高い声が響く。
またか、と昏貞は己の額に片手を添える。彼の専らの悩みは、彼と共に都から下ってきた『ひとり娘』のことだ。
戸を開き、回廊を見やれば、頭痛の種が裸足で駆けて行く後姿が見えて、昏貞は深くため息をついた。
部屋の外で控えていた侍従を呼ぶ。

「あの子をすぐに捕まえよ。縄で縛りつけても良い。とにかく、しばらくは自室に閉じ込めておくのだ」
「直ちに」

侍従はすぐさま追いかけて行ったが、おそらく捕まえることはできないだろう。
娘。――天連（てんれん）は、ただの『娘』ではないからだ。
皇族の、それも青純血として生を受けたにも関わらず、民のように襤褸を纏い、外を駆け回ることを好む風変りな皇女（ひめ）だ。

絹や簪、御香や花よりも、剣や書物を好む。そして、何よりも、6つの頃からずっと天連の心惹きつけて離さない特別なものがある。馬だ。

渕州冱斡は、馬の産出地として、知られている土地である。

幼い天連が馬の魅力に引き寄せられてしまったのは、当然と言えば、当然の成り行きでもあった。

（今日は客人があると言うに……）

それも、ただの客人ではない。天連を娶るつもりでやって来る男だ。

昏貞は我が子を想い、またその将来を想って、再び深く重く息を吐き出した。

冱斡公の客人。――緋鶯（ひおう）が冱斡の地に足を踏み入れたのは、朝が明けてすぐのことだった。

碧色の海を思わす草原に、沈むように小さな城郭がある。

冱斡城を中心に広がった街並みは、都のそれとは比べものにならない。

中央に通った大通り沿いこそ賑わっているが、家々の間隔は広く、

どこか閑散とした雰囲気があった。
不意に足音が響いた。身軽な様子で、駆けてくる。子供の足音だ。
未だ朝靄が街を淡く包み込む時刻に、それに似つかわしくない鋭い声が響いた。

「汽燕（きえん）、遅い！」
「どうか、お待ち下さいっ！」
「早くしろ。翠恋（すいれん）が苦しんでいるんだぞっ」

少年が二人、駆けてくる。１５歳くらいだろうか。
もう一人はそれより２つくらい年下だろう。
言葉遣いから察するに、二人は主従関係にあり、おそらく年下の少年の方が主なのだろう。
だが、身形を見れば、それは逆転して見えた。
年下の少年の方が泥だらけで、縒れた褐衣を身に着けている。

少年達は旋風のように緋鶯のすぐ脇を駆け抜けていった。
旋風に一瞥もされなかったことで、緋鶯は妙に興味を抱いた。追って駆け出す。

少年たちが駆けこんだのは、今にも崩れそうな厩だった。
古い。些細な風でガタガタと、恐ろしいほどの音を立てている。
近付けば、厩の入り口に人垣ができていることに気付いた。
何事かと、側に立つ男に問えば、馬がお産をしているのだという

答えが返ってくる。
それは昨日の昼間から始まったが、その牝馬にとって初めてのお産であるため、ひどい難産だと言う。
どうやら、二人の少年は人垣の内側にいるようだった。
――それにしても、と思う。
たかが、馬が仔を産むだけで、これだけの人が集まる必要があるだろうか。

思いが顔に出てしまっていたのだろう。不意に、男が振り返った。
目尻の垂れた、中年の男だ。
彼は緋鶯をジロリと見やり、薄く笑った。

「あんた、よそ者だな。あの牝馬は特別なのさ」
「ほう？」
「あの牝馬は翠恋って名で、媛（ひめ）さんの馬だからさ」
「媛？」
「あの方さ」

男は顎で厩の中を指した。
牝馬の尻から、枝のような脚が二本出ているのが見えた。
体躯の良い男がその脚に綱を結びつけている。
綱を引いて、仔馬を引っ張り出そうというのだろう。
少年達はどこだろうか、と見渡せば、牝馬の首を懸命に撫でていた。

「どこに媛がいると？」

媛どころか、婢女も、女らしい姿など見当たらなかった。
緋鶯が怪訝な顔をすると、回りの男達はドッと笑い声を上げた。
男は腕を真っ直ぐに伸ばした。今度はきちんと指し示したのである。

「あちらの、一見、少年としか見えないような御方が我らの媛さんさ」
「亜葵（あき）様だ」
「いや、もう幼名は使っちゃなんねぇー」
「そうさ。天連様さ！」

その時、ドサリと何かが落ちた。
男達は息を呑んだ。それぞれに見やる。
ヌルヌルとした黒いそれは、一度、ビクンと痙攣した。

「産まれた！」

少年が声を張った。あの、幼い方の少年である。
事もあろうか、男の指はその少年を指していた。

藁まみれ。

それだけなら、まだ良いだろう。
その少年は馬糞まみれの上、羊水を頭から被っていた。両手は母馬の血で汚れている。

――この少年が媛？
本当に、少年ではなく、少女だというのか？

いや、問題はそれだけではない。
この土地で「媛」などと呼ばれる者は、ただひとりしかいないはずだ。
蒼昏貞のひとり娘、天連皇女だけだ。

ふと、少年の青い瞳が緋鶯を映した。たちまち顔が強張る。
彼は慌てて汚れを払い落とそうとしたが、すぐに思い直して緋鶯の方に歩み寄ってきた。
汚い。
なんて、汚い餓鬼だ。
近くで見れば、衣服の汚れは壮絶なものがあった。緋鶯は顔を顰める。
それに、ひどく臭った。
馬糞の臭いなのだろうが、羊水やらあらゆる臭いも混ざっている。

だが、この青帝国において、青い瞳を持つ者は青純血の者以外にいない。
真血の皇族とて、瞳は民と同じ黒い。
青い瞳は青純血のみが持つ、天を仰ぎ見ることを許された瞳なのだ。

少年、――いや、汚らしい青純血の皇女は、緋鶯のすぐ側まで来ると、不快そうに眉を寄せた。

「見ない顔だな。よそから来たのか？」
「ああ。俺は――」
「――では、お前が蘇緋鶯であろう」

自ら名乗ろうとしていた緋鶯は、先に言い当てられて面食らう。
そんな緋鶯に、少年は続けて言い放った。

「俺は天連。蒼昏貞の娘だ。客人を冱斡城に案内しよう」

出会いの刻　矢を放つ　弐

▼△

「お前はいったい何を考えておるのだ！」

雷が落ちた。

この晴天の空におかしなことが起きるものだ。天連は聞いているのか、いないのか、不真面目な態度で父親の正面に座した。

「良いではないですか。いずれ知られることです。それが早い方が何かと便利ではないですか。隠そうとして、無駄に時を費やさずに済みます」

「では、お前はあの者にすべてを明かすつもりなのか」

「まさか。その必要は無いでしょう。利用できるうちは利用し、要らなくなったら切り捨ててやるつもりです。そのような者にすべてを明かせますか？」

「まったく、お前という者は……」

昏貞は我が子の言葉に低く唸った。

蒼昏貞のひとり娘は、ただの「娘」ではない。

世間には『風変りな皇女』と言われ、あまりにも皇女らしくない様子から冱斡の民たちの間では『媛』などと呼ばれている。

これは、地方豪族の娘たちに対する呼称である。都であったならば、けして許されないことだ。

「それで、蘇緋鶯という男は、どのような者であった？　会ったのであろう？」
「父上もお会いになられたではないですか」
「お前の意見が聞きたいのだ」
「そうですね……」

天連は、ふっと瞼を閉ざした。脳裏に思い浮かべるのは、あの男の顔だ。
いい度胸だと思った。自分に求婚するだなんて。
いくら貴重な青純血の皇女だとしても、青帝国中の男たちが、天連だけは避けて通るだろうと思っていた。
天連は、廃太子である昏貞の子だ。皇籍を奪われなかったとはいえ、昏貞は反逆の罪に問われた過去がある。
そして、媚搖（びよう）皇太后が、この世で最も恐れ、疎み、できることならば消し去りたいと思っている人物こそ、昏貞なのだ。
過去のある昏貞が帝位に着くことは、よほどのことがない限りないだろう。
それでも、彼が最も玉座に相応しい血統をその身に抱いていることは、けして拭えない事実であった。
だからこそ、媚搖は昏貞を恐れる。
いつ、だれが、昏貞を擁立し、彼女の息子を追い落とし、しいては、自分の権威を奪うか知れない。

昏貞に近づくということは、媚搖を敵に回すということだ。
それがどんなにか命知らずであることを知らぬ者はいない。

ところが、文が届いた。
一通は昏貞に、もう一通は天連に求愛の文だ。

（面白い）

媚搖を恐れていないのか。
それとも、ただの莫迦か。とにかく会って、その顔を眺めてみたいと思った。
――強烈な興味心だった。

そうして、出会った男を、天連は未だ計り切れていない。
強いのか。弱いのか。力を持っているのか。持っていないのか。
ただ、ひとつ確かであることは、彼が奔帷（ほんい）を恐れず、冱斡までやって来たということだ。
それだけでも、天連は彼に賭けてみる気持ちになっていた。

ため息が漏らされる。視線を上げれば、疲れ切った昏貞の顔が見えた。

「どちらにせよ、本当に嫁ぐわけにはいくまい」
「なぜですか？　俺、嫁ぎますよ？」
「何を莫迦なことをっ！　嫁げるわけがないだろう」
「けれど、このままこんな田舎で燻っているわけにはいきません。俺はもう13です。元服も済ませました」
「元服！　許すべきではなかった！　いくら皇族とは言え、お前には早すぎたのだ。いや、そもそも、お前が元服したことが都に知ら

れてみよ。媚搖の息がかかった者が必ずお前の命を狙ってやってくるだろう。その者たちは今まで送られてきた刺客たちとは比べようにない手練れに違いない。元服など、すべきではなかった！」

昏貞は頭を両手で抱え込む。

男子が成人したと周囲に認められるために、元服の儀というものを行う。

元服を済ませた男子は、幼名を使わなくなり、婚姻を許され、また、出仕も許されるようになるのだ。

「お前は娘だ。そうでなければ、命はなかった！」

「では、皇女として男に嫁ぎます」

「天連っ！」

「皇子であっても、こんな田舎で刺客に怯え、媚搖を恐れ、息をひそめるように生きるのはまっぴらなのです！　俺は都に行きたい。父上が得られなかった玉座を、俺が手に入れて見せます！」

吐き捨てるように言い放つと、天連は腰を上げ、呼び止める声にも耳を貸さず、昏貞の居室を飛び出した。

回廊を音を大きく立てて駆ける。

長い裳が足に絡みついて走りにくい。結い上げた髪は重く、耳のすぐ横で鳴り響く簪は煩い。

嫌いだ。大嫌いだ。ひらひらと煩わしい絹の衣も、ずしりと重い装飾品も、全部ぜんぶ嫌いだ。

けれど、それらはすべて、今の自分を護っている盾であり、鎧であった。

昏貞の娘。――娘でなければ、天連はこの歳まで生き延びること

はできなかっただろう。
だが、事実は異なる。天連は昏貞の娘ではなく、息子だ。すなわち、青純血の皇子である。

（いったい、いつになれば自分らしく生きられる？）

媚搖皇太后が死ぬまでの我慢だろうか。
彼女の息子である今の皇帝が、息子をつくり、その子が無事に帝位を継げるまでだろうか。

――そんなに長く待ってなどいられるものか。

父、昏貞には力が無い。そして、自分の無力は、血を吐くほど自覚している。
力が欲しい。力が。
誰からも命を脅かされない力が。
自分らしく堂々と生きていける力が。

そう強く天連が願った時に現れた者が、緋鶯だった。
やはり彼なのだ。彼しかいない。天連は回廊の途中で歩みを止め、ふっと空を見上げた。
彼に賭けてみよう。緋鶯という「船」に乗り、世界という「海」に出るのだ。

△▼

「緋鶯殿、狩りは好きか？」

緋鶯が客人として冱斡城にやってきた翌日。
天連はいつものように褐衣を身に着け、緋鶯が使う客間を訪れ、彼を狩りに誘った。
彼に賭けてみると決意したものの、もう少し彼のことを知りたいと思ったからだ。
緋鶯は意外そうな表情を浮かべてから、すぐに是と答える。女が本当に狩りができるものかと、思ったのだろう。
天連は些か気分を害しながら馬を走らせ、狩場へと向かった。

ビュッと矢が鳴る。
トスッ。小さな音を響かせて、兎の頭を矢が貫いた。矢尻が紅い。
天連の放った矢だ。

「見事」

手を叩く音が風に流れてきて、振り返ると、乗馬した緋鶯が追ってきていた。

天連と馬を並べる。

「弓の腕もさることながら、何と言っても、馬の扱いが素晴らしい。人馬一体とはこのことかと感心した」

「５つの時から乗っている」

「ほう」

誉められれば悪い気はしない。

特に馬の扱いについて言われると、自然に口元が緩んでしまう。

乗馬には自信があった。

馬を駆けさせると、緋鶯の言う通り、その馬と一体化しているという実感が湧く。馬と共に旋風になった心地がするのだ。

天連が自分の腕前を見せつけられたことに満足すると、緋鶯の目が細められる。

彼は更に何かを言おうとしたが、その前に天連は彼から目を逸らした。

天連が射た兎を拾いに馬を走らせている汽燕が何か叫んだ。おそらく賞賛の言葉だろう。

汽燕は天連が幼いころから仕えてくれている同世代の従者だ。どんな時でも天連の味方であり、一番に賞賛の言葉をくれた。

汽燕は素早く馬から降り、兎を手にすると、高々と掲げる。たちまち歓声が上がった。

自分の射た矢を確認してみれば、矢は兎の上後頭部から鼻の下辺りに向かって貫いている。
兎は絶命しており、ピクリとも動かなかった
天連は共に兎を狩った馬を労うように、その首を優しく撫でる。
馬は気持ちよさそうに鼻を鳴らした。

出会いの刻　矢を放つ　　参

「天連皇女は、馬がお好きか？」

突然の緋鶯の言葉に、ビクリと体を震わせて、天連は自分の馬から目を逸らす。

「ああ、馬の駆けている姿が好きだ。馬の駆けている時の蹄の音が好き。馬に乗り、共に駆けることが何よりも好きだ」

突然すぎて言葉を繕う間がなかった。
心に思っているままを口にしたら、何という幼い言い様だろう。
天連は気恥ずかしくなって、彼からも目を逸らした。
緋鶯の馬が足踏みをした。

「貴女に馬を贈りたい」
「馬なら数頭持っている」
「冱斡の馬ではなく、他の土地の馬です」

天連は怪訝な顔を緋鶯に向けた。
顔が近い。息が交じる程だ。

「冱斡の馬は確かに良い馬と言える。他のどの土地で育った馬よりも、数倍に足が速い。――だが、弱い」
「弱い？」
「すぐに足を折る。荷を乗せたら、人は乗れず。人を乗せたら、荷は乗せられない。背を重くし駆けさせると、すぐに足を折る」
「それは馬を酷使しているからだ。扱いが悪い。もっと大事に扱えば……」
「戦にそのような余裕はない」
「けれど」

言いかけた。だが、すぐに口を閉ざした。
天連は戦を知らない。
戦だけではない。冱斡以外の土地さえ知らなかった。

「冱斡の馬を比類ない最高の名馬だと言い切るには、貴女はまだ無知過ぎる。他を知って、再び冱斡の馬を知る。そうしてから、初めて、それらを比較し、評価することができるのではないだろうか」

違うかと問われれば、首を振るしかなかった。
緋鶯は正しい。
自分は幼く、そして、無知だ。

（知りたい。もっと。もっと。世界を）

無知を自覚するたびに願う。知りたいと。

天連は緋鶯を見上げた。この男は教えてくれるだろうか。
少なくとも彼は天連よりも世界を知っているに違いなかった。
天連は意を決して、言葉を紡ぐ。

「貴方は俺に、この土地にはない、外のことを教えてくれるだろうか？」
「貴女が望めば」
「俺が望めば？」

じっと、自分のことを見つめてくる瞳を、天連は恐ろしいと思った。
緋鶯の瞳は、自分のそれとは異なり、闇のように暗い。
だが、まるで黒曜石のように強い輝きを放っている。

（なんて強い眼差しだろう。こんな瞳を持つ者など知らない）

少なくとも今まで自分の周りにはいなかった。天連は、ざわざわと騒ぎ始めた己の胸を拳で押さえ付けた。
綺麗だと思うが、同時に恐ろしく、命を脅かされるのではないかという不安感を抱かせられる。
恐ろしい。逃げたい。だが、ずっと、その瞳を見つめていたい。
見つめられていたい。
相反する想いに戸惑い、結局、天連は彼の瞳から逃れるように顔を逸らした。

「次は貴方が仕留めて下さい、緋鶯殿」

そう言うだけで精一杯だった。緋鶯は、承知、と短く答えて馬を駆けさせた。

やがて、獲物を見つけた従者の声が響き、他の従者たちと共に、その獲物を囲んでいく。

緋鶯は矢じりを絞った。追われて草むらから飛び出して来た獣に狙いを定め、矢を放つ。

矢は大気を切り裂き、肉を貫いた。

獣が鳴いた。鈍い音を響かせ、地に倒れる。

言葉がなかった。

地面を見下ろせば、大きな牡鹿がビクビクと痙攣し、細い足で土を蹴っている。

土埃が舞う。

天連は瞬きすら忘れて、その様をジッと見守っていた。

やがて、鹿は静かになった。

「信じられない。矢一本で鹿を仕留めるなんて」

自分にはできないことだ。

兎よりも速い鹿の動きを追うのは難しい。

それでも天連にだって、命中させることくらいできるかもしれない。

だが、天連の矢には力がない。腕力が足らないのだ。

悔しいが、適わないと思った。

「お見事です」

緋鶯を仰ぎ見て言った。

そして思う。ずるい、と。

天連は身体の線の細い少年であった。

少女として育てられたのだ。そこらの少年達とは違うのも当然だろう。

背丈も低く、色も白く、幼いせいもあるが、性別を感じさせない顔立ちだ。

一方、緋鶯は、天連の瞳には途轍もなく大きく映った。

それは、背丈が常人以上だということではない。

少しでも気を許せば、その一瞬で、彼の気迫に呑み込まれてしまいそうだということだ。

覆われ、押さえ付けられ、彼の内に取り込まれたら、もう二度と空は飛べない。

逃れられない。

緋鶯の広い肩が目に映る。

男らしい太い腕。

この逞しい腕が、牡鹿を仕留めたのだ。

これが天を仰ぐ男なのだ、と天連は思った。

乱世を生きる男の姿なのだ、と。

同じ男なのに。

同じ時代に生まれ、天を目指す同じ男なのに、どうして自分と彼はこんなにも違うのだろう。
呑み込まれると思った。
いや、もはや自分は彼に捕らわれてしまったのではないだろうか？
嫌だ。囚われたくはない。
彼に呑み込まれたくない。
なぜなら、取り込むのは、自分の方だ。
天連こそが彼を取り込み、自分の力とするのだ。

（自分の力……。俺の力……）

そうだと思い、改めて彼を見れば、なんて頼り甲斐のある強い力だろうか。
欲しい。この力が。彼が欲しい。
意思の強そうな瞳も、賢そうに吊り上った眉も、無駄な肉のない顎も。全部ぜんぶ欲しい。
適度に筋肉がついた胸板。力強い腕。馬の手綱を操るその骨ばった手も、自分の物にしたい。

天連は馬から降り、手綱を汽燕に預けると、緋鶯を呼んだ。
彼も馬を従者に預けて、天連に歩み寄ってくる。

（媚揺さえいなければ）

どれほど、天連は願っただろう。
この乱世に男として生み落とされながらも、女として生きなければならない者の苦しみは、誰にも理解できない。
そのように生きろと命じた父を恨んだりしない。
彼は彼なりに、天連のことを想い、護ってくれようとしてくれているのだから。
だが、胸の奥から湧き上がる想いを、この屈辱をどう扱えば良い？
緋鶯のような男を見ると、胸が苦しい。
同じ男なのに、と思ってしまう。

「緋鶯殿……」

天連の髪を風が乱す。
ちっぽけな存在を嘲笑うかのように。

「俺は、貴方が欲しい。実を言えば、貴方をこの地に呼んだのは俺なのだ。父上は反対されたが、俺は貴方に興味があった。貴方は媚揺を恐れていないから」

恐れていないのか。それとも莫迦なのかと疑ったが、間違いなく緋鶯は前者だ。
彼を纏う空気を見れば分かる。
このような気を纏っているものが、他の誰かを恐れるものか。
緋鶯が一歩、天連に向かって足を進めると、緩やかに大気が移動

するのを感じた。

「恙皇太后――媚搖を、討ちたいのですか？」
「違う。俺が望んでいるものは、そのようなものではない」
「では、何を望んでおられる？」
「知ってどうする？　貴方が望むものを代わりに差し出せば、叶えてくれるのか？」
「聞かせて頂きたい」

緋鶯が望んでいるもの。それが何であるのか、天連には分かっている。
血だ。天連に流れる蒼家の血を、彼は欲しているのだ。
緋鶯の出自など、彼が文をくれた時、既に調べてしまっている。
風が何かを叫びながら、駆け抜けていく。春の生暖かい風だった。
息を吐き出す。胸の奥底から。

「俺の望みは唯一つ。――玉座だ」

息を呑む音が聞こえたような気がして、天連は拳をつくった。

「力が欲しい。武力が。軍が欲しい！　玉座に手が届くくらいの力が！」
「――ならば、貴女に差し上げよう」

あっさりと、即座に言われて、天連は緋鶯を見上げる。
瞳の奥に、何とも言い様のない強い炎が見えた気がした。

「貴方がわたしに貴方の血を下さるのなら、わたしは貴方に武力を差し上げよう」
「緋鶯殿が？」
「貴女が持ち得ないものは、わたしが持っている。わたしが持ち得ないものを貴女が持っているように」
「この血が、それ程お望みか？」
「貴女が力を望む程に」

咽が鳴る。全身が震えだした。

「貴方も天を仰ぎたい、乱世に生きる男のひとりなのだな」

天を仰ぐ。それは暗に、国、つまりは、青帝国の行き先を考えることを意味した。
と同時に、新たな国を望み、帝位を欲することを意味する。

（この者も、自分と同じ、玉座を狙う野心家だ）

天連の作った拳に力を込める。すると、その拳に緋鶯の両手が添えられた。

包み込まれるように覆われ、泣きそうになる。

「わたしと貴女は比翼の鳥なのだ」

「ひよくのとり？」

比翼の鳥とは伝説上の鳥のことだ。

雌雄各一翼で、常に一体となって飛ぶ鳥なのだという。

「わたしたちは互いに翼を分け合って生きている。わたしの翼には武力が、貴女の翼には蒼家の血が。共に羽ばたかねば、この乱世の空を飛び行くことができない」

それに、と緋鶯は年齢にそぐわない悪戯な笑みを浮かべて続ける。

「天連という名が気に入った」

「名を？」

「天に連なる者という意味であろう？　連なるとは、続く、並ぶ、という意味だ。天に続く者。天と並ぶ存在。それは天に一番近い存在という意味。貴女がわたしの傍にいてくれれば、天に近付けるように思えるのだ。貴女がわたしのものになってくれれば、天を手に入れられる、又は、天そのものになれる気がした」

「大きいことを仰る」

天連は笑った。悪くないと思った。

「緋鶯殿。貴方はわたしを裏切らないと誓えるか？」
「貴女はわたしの片翼だ。自身の躰を傷付けたりはしない」
「わたしの望みは玉座だ。時が来たら、わたしの為、本当に軍を貸してくださるか？」
「差し上げる」
「貴方は玉座を望んでいないのか？　自分自身が玉座に着くことを考えたりしないか？」
「わたしは青王朝の玉座など望んではいない。ただ、この乱世を思うままに行きたいのだ」

天連は瞼を閉ざした。そして、ゆっくりと瞼を開いた。
緋鶯の顔を真っ直ぐに見つめる。
体の震えは止まっていた。しっかりとした口調で言い放つ。

「貴方に、貴方が望むものを差し上げようと思う」

鳥羽ばたく刻　宵闇の真実　　壱

小さな城郭が移動するかのようだ。
緋鶯（ひおう）が冱斡（ごかん）に連れてきた兵が千。
天連（てんれん）が父親から譲り受け、冱斡から連れて行く騎兵が二百と歩兵が五百。そして、数十名の侍女たちが長い列をつくっている。

昨晩、天連は緋鶯と祝言を上げた。
これで二人は夫婦になったことになるが、婚姻を結ぶにあたって、天連は緋鶯に約束して貰ったことがある。
天連は今年１３歳だ。１３で嫁ぐ娘はいくらでもいるが、共寝するには些か幼いと言えた。
故に、天連の体が成熟するまで、待って欲しいという約束だ。
緋鶯は未だ天連が男子であることを知らなかった。

（いつまで隠し通せるだろうか）

いつまでも幼さを理由に拒むつもりではいるが、そう長くは隠し通せられないだろう。
その前に、力を付けなければならない。
都にさえ行けば、父、昏貞を指示する者が未だいるかもしれない。
その者たちが天連の味方になってくれれば、緋鶯など、もう不要だ。

都でなくとも、緋鶯よりも扱いやすい者がいるかもしれない。
緋鶯よりも力を持ち、だが、野心はなく、天連のことに興味を持

ってくれる者がいるかもしれない。
緋鶯との婚姻は、そういう者が現れるまでの繋ぎだ。
覚悟を決めて冱斡城を出発した天連は、兵たちに囲まれるように護られた馬車の中で、固く瞼を閉ざした。
そして、けして後ろを振り返らない。
後戻りなど、できるわけがないからだ。

幼い天連の瞳には広大で、けして越えられない壁のように見えた冱斡城も、やがて小さくなり、あるとき、ふっと消えて、見えなくなってしまった。
海原のようであった草原の豊かな緑も、半日も進めば、埃っぽい大地へと変わる。
この地は雨が降っても大地が潤うことがないため、草木が育ちにくい場所なのだという。
乾燥した黄土の道の両脇には、荒っぽい岩山が無言で佇んでいる。
語りかけても応えてくれぬモノたちを眺めながら、天連は物寂しい気持ちになった。

やがて日入りの時刻になって、行進は止まった。
乾燥した土地に、白い花が咲くように、次々と天幕が張られていく。
天連はその様子を馬車の中で見守っていた。
この車だけは、6畳ほどの広さがある。
簡単な寝床が用意され、天連はこの馬車の中で眠る。食事も馬車の中で済ました。

不自由ではあるが、天幕よりはいくらかマシだろう。
天幕の中に寝台を運び入れ、その上で眠ることができるのは、おそらく緋鶯と、彼の従弟であり右腕の臥笙(がしょう)将軍くらいだろう。
ほとんどの天幕は、屋根が確保されているだけで、ほとんど地べたで眠るのと変わらないのだ。
天連は不平を口に出すことなく、寝床に横たわった。

煌々と、かかり火が燃え上がる。
飛び散った火の粉は、命あるもののように、パチパチと大きく鳴いて、死んでいく。
しかし、その声は天幕までは届かない。
分厚い布で覆われた天幕の内は静まり返り、中央に用意された卓の上に地図を広げれば、その羊皮紙の音さえ響いて聞こえた。
羊皮紙に描かれた青帝国の地図の上を、緋鶯の指が滑る。それを、すぐ脇で眺めていた臥笙が口を開いた。

「汐銚(せきちょう)兄ぃとは、斉郡に入る前――この辺りで合流できるはずだ。兄ぃが琲州(はいしゅう)に残してきた兵を率いてくるから、ここの兵たちと合わせて、一万近くになる」
「勝てるな」
「緋鶯が負けるはずかない」

臥笙は汐銚の弟で、緋鶯とは同じ年である。

従弟であると同時に幼馴染でもあり、主従関係にはあるが、気安い関係である。
こうして他に人の目がない場所では、改まった口の利き方をしなくとも許していた。
生来、明るい性格の臥笙を冱斡（ごかん）に伴ったのは、渕州（えんしゅう）に潜り込むにあたって、その明るさで不運を吹き飛ばしてくれそうな気がしたからだ。
そんな緋鶯の願いが通じたのか、渕州を拠点とする奔帷（ほんい）に知られることなく、渕州に足を踏み入れ、天連を娶ることができた。

ところが、事は緋鶯と臥笙が留守にしている琲州霖谷にある緋鶯の実家で起こったのだ。
すぐに緋鶯のもとに文が届けられた。留守を任せたから汐銚の文だ。
緋鶯は文を一読すると、やはりと、盛大にため息を漏らす。
読み通りのことが起きた。だが、その読みが当たったことを喜んではいなかった。

文の内容は、斉郡（さいぐん）から援軍の要請がきたというものだ。
斉郡は渕州内に位置し、今年の初めから農民叛乱が起きている。

渕州は奔帷の支配下にある。もちろん斉郡も奔帷の支配下にある土地だ。
援軍を要請してきたのは斉郡の太守からであるが、これの影には奔帷の思惑が露わになって見えていた。
要請に従うか否かには、同時に奔帷に従う否かの意がある。

斉郡に援軍を出すことは容易い。
渕州牧の奔帷を助け、恩を売って置くのも良い。今はまだ、敵に回したくない相手であることも事実だ。

だが、人はこれを奔帷と手を組んだのだと見なすだろう。
そのまま緋鶯は奔帷の部将に収まるつもりなのだ、と。

違うのだ、と緋鶯は奥歯を噛み締める。
緋鶯には、けして奔帷の部将になるつもりはない。
今はまだ、敵対するだけの力がないから、とりあえず奔帷の懐に飛び込み、すべきことをし、喰い千切るように逃げ出してやるつもりだ。

ところで、と臥笙が言葉を発す。
考えに頭を巡らせていた緋鶯は、はっと我に返って臥笙を見やった。
にぃっと臥笙の唇が横に引かれる。嫌な笑い方だ、と緋鶯は思った。
幼い頃から、緋鶯をからかう時に臥笙が浮かべる笑みが、これだ。

「ところで、緋鶯。この天幕で休むつもりなのか？」
「そのつもりだが……？」
「馬鹿な。新婚だぞ。相手は１３の餓鬼だが、嫁は嫁だ。花嫁を放っておくつもりか？　男を疑われるぞ。昨夜だって、お前は独り寝をしたらしいではないか」

臥笙が両腕を大きく広げて、呆れたように言う。
緋鶯は片手を振った。

「そういう約束だ」
「約束？　馬鹿な。祝言を上げてしまった後も律儀にまもってやるつもりか？　離縁だと騒がれても、冱斡はもう遠い。地平線の向こうだ」

からから笑って臥笙は言う。

「それに、蒼家の青純血の娘だと言っても、妻は妻。今からそんなんじゃあ、あんな年下の妻に舐められ、尻に敷かれていると、部下たちに笑われるようになるぞ」
「それは、困るな……」
「だろう？　なら、今すぐ新妻のもとに行くんだな。そして、朝まで天幕に戻ってくるんじゃないぞ」

臥笙は緋鶯の背中を何度も強く叩く。
励ますようでもあり、からかうようでもあるその態度に、緋鶯は苦笑を漏らして、天幕を出た。

△
▼

緋鶯は天連の馬車の前まで来て、はたと足を止めた。
天連と出会ってから、数日が経つ。
その数日で判ったことだが、天連の口は悪い。とても皇族とは思えない言葉を使うこともある。
幼いころから男装姿で城下を駆け回り、身分を問わず友人を作ってきたからだというから、そのせいなのだろう。
だが、本当に、それだけが理由なのだろうか。
いくら王宮ではなく、片田舎で育ったとは言え、天連は皇女だ。
皇女ともあろう者が、男装して城下を下賤の者たちと一緒になって駆け回るものなのだろうか。
緋鶯が知る女たちは皆、汚いものには触れたがらず、綺麗なものだけを見ようとする。
艶やかな絹が好きで、それらを身に纏い、煌めく玉を集めて得意げになる。そんな女たちばかりだった。

ところが、天連はと言えば、馬の出産にまで立ち会ってしまう少女だ。
血に濡れることも厭わない。
共に狩りに出て分かったことだが、天連は慣れているのだ。
馬に乗ることも、弓を引くことも、血が流れる様を眺めることも。

（第一、玉座が欲しいなど、普通の娘が言う言葉か？）

数少ない青純血で、玉座を臨むことのできる希少な存在だとは言え、青帝国が女帝を仰いだことは一度もない。
女の身である天連が玉座に着くことは、到底、考えられないことなのだ。

（不思議な娘だ。我が新妻は……）

緋鶯は馬車の出入り口に垂らされた御簾に手を伸ばしながら、内にいるであろう天連に向かって声を掛けた。

鳥羽ばたく刻　宵闇の真実　　弐

気配を感じて、ぱちりと瞼が開いた。
天連は剣を手繰り寄せ、すばやく寝床から上体を起こす。視線を転じれば、馬車の出入り口に垂らした御簾に人影が映っていた。

「誰だ！」

（刺客か？！）

天連は青ざめた。
生まれてから13年間、天連の生は、媚搖（びよう）皇太后が送り付けてくる刺客に怯える日々だった。
玉座を臨めない女子であると、媚搖は天連のことをそう思っているはずだった。
それでも、彼女の不安は拭えないのか、それとも、恐ろしいまでの女の勘が働くのか。
女子であると知りつつも、媚搖は何度も冱斡城に刺客を送り込んできた。
ある時は、食事に毒を盛られ、ある時は、信じていた侍女が刃物を手に襲ってくる。
そんな日々を送りながらも、天連が今日まで生き延びてこられたのは、やはり、天連を女子だと思っている媚搖の甘さがあったおかげだ。

青純血の天連が、同じく青純血の何者かと婚姻を結び、青純血の息子を生まない限り、媚搖と彼女の息子の脅威にはなりようがない。
――そう、媚搖が思っていてくれるうちは、天連の本当の危険は訪れないはずであった。

カチャリ、と握りしめた剣が鳴れば、御簾の外で息を呑む音が響いた。
人影が声を発する。

「俺だ」
「緋鶯？」
「そうだ。入るぞ」

御簾がゆっくりと、たくし上げられる。
緋鶯は天連を見て、ギョッとした表情を浮かべた。天連は小首を傾げる。

「何だ？」
「そんな物を構えて、どうするつもりだ？」
「ああ、これか。刺客なら、切り捨ててやるつもりだったんだ」

天連はわずかに剣を持ち上げて、笑った。
緋鶯が眼を細める。

「安心しろ。警固はしっかりとしている。寝ずの見張りも立てている」
「……そうだな」

天連は薄い夜着を一枚纏っているだけだった。
自分の格好に気付いて、慌てて明日の為に用意されていた上着を引き寄せ、羽織る。
と同時に、馬車の中に明かりが灯った。緋鶯が灯した燭台の炎が、ゆらりゆらりと不安定に揺らぎ、２人の影を波立たせる。

「媚搖が怖いか？」
「まだ死にたくない」
「死なせはせん」
「だと良いけど……。それで？」

何の用だ？と、天連は緋鶯を見上げた。
緋鶯は無言で、天連のために用意された寝床にゴロリと横たわった。
驚いたのは天連だ。上から覗き込むようにして、緋鶯を見やる。

「お前、何しているんだ？」
「俺もここで休む」
「ここで？　俺は？　それなら、俺はどこで眠るのだ？」

世間体には『皇女』であるはずの天連は、己が男であることを隠そうとしなかった。
その振る舞いも、その行動も、自身のことを『俺』と言うことも、憚らないのである。
そのように自然体な天連を、誰もが『皇女』だと信じて疑わなかったことも、彼の振る舞いに拍車をかけた。
夫である緋鶯の前でも、その態度を改めようと思わない。
まるで城下の少年のような口調に、緋鶯の眉が歪められた。

「本当に皇女なのだろな？　身代わりの偽物だということはないか？」
「よく見ろ、瞳が青いだろ」

空を映したように青い瞳を見せようと、天連は緋鶯に顔を近づけた。

「……青いな」
「分かったら出ていけ。共寝はしない約束だ」

ところが、緋鶯は動こうとしない。
どうやらここで一晩明かすつもりらしい。

（冗談ではない！）

天連は忌々しく、すっかり眠る体勢に入っている緋鶯を見下ろした。
自分は確かに緋鶯に嫁いだが、それは形ばかりだ。彼を利用するために仕方がなく、そういうことになってしまったのだ。
どうして夜の相手までしなければならない？
自分は男であるし、いくら女の振りをしているからと言って、夜の情事までも女のようにはいかないだろう。

（第一、服を脱がされたら男だと知られてしまう！）

青ざめる天連に、不意に、緋鶯が噴き出した。
ギクリとして見やると、彼は天連の腕を引いて床に転がした。

「うわっ、何をする！？」
「眠れ」
「え？」

天連の心の内など、何もかもお見通しだとばかりに嗤う。

「安心しろ。何もしない。さすがの俺も、その薄っぺらい胸を前にすれば、萎える」
「なえる……？」

天連は、己の胸に手をやった。

膨らみのない真っ平らな胸を自身の手で撫でると、何やら笑みが湧いた。

「そうか！　緋鶯は巨乳が好きなのだなっ」
「……」
「いいぞ。うん。それは良いことだ。せいぜい、俺の胸が膨らむまで待つことだ！」

（永遠に待ってろ、阿呆がっ）

胸の内で毒気を吐けば、すぅっと不安が退き、安堵のため息が漏れた。
2人で使うには狭い寝床で、体が安定する場所を見つけると、寝る姿勢をつくる。
何もされないとは言え、隣に男が眠っていることに不満がないわけではないが、邸とは違い、野営の夜は肌寒い。
荒涼とした大地を吹き抜けてくる風は、天連を載せた馬車の中まで入っては来ないが、ギシギシと不気味な音を立てて大きく揺らした。
侍女たちは別の場所で眠るため、たったひとりで寝床についたものの、宵闇の気味の悪さに寝つけずにいたのだ。

ころんと寝返りを打ち、わずかに体を丸めれば、天連の頭はちょうど緋鶯の胸元に収まった。
緋鶯の鼓動が聞こえる。その規則的な音を感じていると、しだいに天連のもとに眠気が訪れた。

（利用できる内は、すべて利用尽くしてやろう……）

逞しい両腕に包まれれば、ひどく心地良くて、夢の狭間で、そんなことを呟いた気がした。

「天連……」
「……ん…」

重い。心地良かったはずの温もりが、不意に重みに変わって、天連は軽く喘いだ。
苦しい。だが、柔らかくて、気持ちいいような気もする。
なんだろうか、この感覚は。夢見るのとは違う、ふわふわした感覚だ。
頭の芯が、ぼぉーっと、薄靄に覆われていくような……。

「って！　何してんだっ！！！」

驚愕して、天連は目の前の胸板を力いっぱいに押しやり、体を離そうとした。
だが、離れたのは唇だけだ。体重を掛けて伸し掛かっている体までは引き離せなかった。

「血迷ったか！」

「気が変わった。それに、侮られるのは好きではないのでな」
「胸が膨らむまで待つと言った！」
「お前がな。……だが、そうだな。どうしても待たねばならぬのなら、今の状態を確認しておこう」
「なっ！」

待て！　と声を上げたが、間に合うはずもなく。
天連は薄い夜着と、簡単に羽織っただけの上着を恨んだ。

「……見事に、まっ平らだな」

何の膨らみのない胸の上を、緋鶯の荒い手が滑る。
その感覚に天連は顔を赤らめた。

「だから、そうだと言った！　萎えただろっ。もうそれ以上は触るな！　退け！　重い！　気持ち悪いっ！」
「随分な言いようだな」
「黙れっ！　うるさいっ！」
「この…っ」

さすがに気分を害したのか、緋鶯は天連に苦痛を与える意を持って、その胸元に、がぶりと噛みついた。
天連の体が弓なりに反る。

「痛っ」

揺らぐ炎の灯りに照らされて、大きく歯型が刻まれた幼い体が浮かび上がる。
その体を見下ろして、緋鶯は冷ややかに言い放った。

「青純血とは言え、我らは夫婦となった。夫と妻、どちらが主であるか、はっきりさせようではないか」

鳥羽ばたく刻　宵闇の真実　参

「ふざけるなっ！」

青い瞳で睨み上げるが、力では敵わないことは明白だ。
夜中に夫婦の営みを邪魔しようなどと考える者もいない。つまり、天連の助けは来ない！
知られてしまう、何もかも！　そう思う気持ちよりも、喰われるのではないかという恐怖心の方が勝っていた。
恐ろしさに、青い瞳はたちまち濡れ揺らぐ。

「やめろ…。いやだ……」
「妻の尻に敷かれていると部下に嗤われるなど、俺には耐えられん。従弟にからかわれるのだって、我慢できそうにないのだ。約束を守れないことを申し訳なく思うが、お前が拒まなければ酷いようにはしない。しっかりと瞼を閉ざして我慢していろ。苦痛は、すぐに終わる」
「……っ！」

一瞬にして、衣類を剥ぎ取られた。血の気が下がり、天連の顔が蒼白になる。
己の身にいったい何が起こっているのか、さっぱり分からない！

「やっ」

逃れようと藻掻く。
天連の手のひらが緋鶯の頬に当たり、小さな音を鳴らした。
それでも緋鶯は己の腕の中から、天連の体を逃さなかった。
緋鶯の手が天連の素肌に触れる。ビクリと全身が震えた。
その手はあらゆる場所を弄りながら、下へ、下へと移動して行った。

「あっ」

思いもしない部分に触れられて、天連は悲鳴を上げた。
緋鶯の口からも疑問の声が漏らされる。彼の予想もしなかったモノが、彼の手に触れたからである。
己の手の感触が信じられない緋鶯は、自身の目で確かめようと、天連の体を自分から引き離した。

「……」

息を呑む。
到底、信じられなかった。

「天連……。お前は、男なのか？」

――殺される！

瞬時に沸いた恐怖が、それだった。
お互い、血の気の引いた顔で見つめ合う。いや、睨み合っていた。
脱がされた衣類を着直すこともできない。少しでも身じろげば、鋭い爪と牙が襲ってくる。そんな雰囲気だった。

「……」

不意に、緊張の糸が切れた。
先に言葉を発したのは、緋鶯の方だった。

「そうか。やはり男だったのか……」

これまで何度も、こんな皇女などいるはずがないと思ってきたせいか、緋鶯に、やはりそうなのかという思いが湧いてきた。
皇女ではなく皇子なのだと思えば、なるほど、出会ってから今まで天連に皇女らしさは皆無だった。
なぜ皇女だと疑いもせず信じたのか、むしろ、その方が疑問に思

えてきてしまう。
緋鶯は自分の愚かさが滑稽に思えてきて、笑いが込み上げてきてしまった。
腹を抱えて、げらげらと笑い出す。

「緋鶯……？」

そんな緋鶯に天連は驚愕する。
知らなかったとは言え、男を妻に迎えてしまったことに気付き、気が狂ってしまったのだろうか。
そんな不安に、ますます顔を青ざめる。どうにか、この場を収めることはできないものかと、必死に言葉を捜した。

「緋鶯、これには理由が……」
「理由？　そうだろうな。理由はあるだろな」
「お前を騙したことは事実だが、他にどうすることもできなかったのだ。手がなかった」

緋鶯の笑い声が、はたと止まり、鋭い視線が天連を射る。

「手が無かっただと？」
「生き延びるためだ！　自分らしく生きるために、こうするしかなかった！　――俺はどうしても、あんたがっ。蘇緋鶯が欲しかったんだ！」

黒曜石の瞳が揺らぎ、視線を逸らされる。

「生き延びるために女子として育てられたか？　あのまま、冱斡の地で生涯を終えるのは我慢ならなかったのか？」

「絶対に嫌だ！」

はっきりと告げると、再び黒曜石の瞳が天連を映す。ふっと、その瞳が細められた。

腕を伸ばされ、くしゃりと頭を撫でられる。天連は戸惑い、緋鶯を見上げた。

「俺を、殺さないのか？」

「なぜ殺す？」

「お前を侮り、謀った」

「……殺さない」

「では、冱斡城に送り返すつもりか？」

「なぜだ？」

「だって……っ」

「お前は俺の妻だろう？」

「でも、俺は男だ！」

腕を引かれ、緋鶯の胸の中に倒れ込む。天連はその一瞬、呼吸を忘れた。

「言ったであろう。お前は俺の片翼なのだと。ようやく手に入れた片翼なのだ。今更、手放すことはできない」
「でも……」
「女の振りをしていろ。今は、それで良い」
「……」

そうすれば、と緋鶯は言葉を続けた。

「――そうすれば、玉座を手に入れてやろう」

天連は思わず、緋鶯の顔を仰ぎ見る。
思いがけず距離が近い。今にも自分に覆い被さって来そうな男を見つめて、天連は身を固くする。
そして、喉を震わせ、絞り出すように一言、緋鶯に告げた。

「必ず。……必ずだ。約束を違えるな」

この男の身で彼に嫁ぐと決めた時に、覚悟を決めたはずだった。
後戻りはできない。
いつだって、自分が歩む道は細い糸のように不安定で、少しでも揺らげば暗く深い谷底に落ちてしまうような生き方だ。
後戻りはできない。用意された道は、ひとつだ。
ならば、突き進むしかないではないか。
すべては、己のあるべき姿を取り戻すために――。

△
▼

緋鶯と天連の一行が斉郡に踏み入れる前に、汐銚が琲州から率いて来た兵たちが合流した。

冱斡城を出発して五日目の正午のことだ。

斉郡に入ったのは、その日の夕刻。

斉郡に入ってすぐ、太守から使わされたという迎えの者が千の兵を連れて現れた。

緋鶯の兵が千で、天連の兵が七百。汐銚が連れてきた兵が八千。

そして、迎えの兵が千。
一万を超える人の群れを、天連は初めて目に映した。
四方どこを見ても、人、人、人。
大地を埋め尽くす勢いだ。熱気に溢れ、空気が薄くなったように思う。
これだけの人数である。
敵の目から隠れようにないものだが、そこを隠れるように、斉郡には夜更けを過ぎてから進軍した。
そうして斉郡城に到着したのは、東の空が明るくなり始めた頃だった。

斉郡城に用意された一室で、ひと眠りした天連はようやく、この地で叛乱が起きていることを知る。
詳しい事情を緋鶯に尋ねようとしたが、緋鶯はすでに出陣した後だった。

そうして、半月という月日が流れた。
どうやら、緋鶯が斉郡の叛乱を鎮定したらしい。
たった半月で……との声が高い。
このことは、彼が世に名を知らしめた出来事となった。

人々は囁く。
青純血の娘を妻に迎えた緋鶯が力を付けているらしい、と。

此度の戦で、斉郡太守は反乱軍に討たれてしまった。

空になった斉郡太守の席を、奔帷の任命で緋鶯が引き継ぐこととなった。

光差す刻　衣脱ぎ捨てる　　壱

鳥。
どこに潜んでいたのか、不意に姿を現し、青く澄んだ空へと駆け上っていく。
許可を請う声が響いて、緋鶯（ひおう）は戸口の方に視線を向けた。

「来たか」
「はい」

滑るような流れるような動作で部屋に入ってきた男は、女とも見誤るほどの美しい青年であったが、その端麗な顔は緋鶯の居室を見渡すなり、濃い影を帯びた。
足の踏み場がないとはよく言ったもので、入室を拒んでいるとしか思えないほど、その部屋は書物で埋もれている。
彼は自分が座る場所を確保するために、白く長い指で数冊拾い上げ、拾い上げたものの置く場所がないので、己の膝の上に抱えた。

「お召しだと聞きましたが」
「そうだ。呼んだ。が、まずは部屋を片付けてくれ。お前に見せようと思っていた文が見つからない」
「そう、おっしゃるであろうと思っていました。すぐに」
彼――李槇抄（りしんしょう）は、緋鶯が三顧の礼で迎えた軍師である。
その頭脳には小宇宙が詰まっているとまで言われた天才であるが、

緋鶯が一番頼りにしている彼の才は、部屋の片付けの才かもしれない。
その才に恵まれなかった緋鶯は、月に何度も槇抄を自室に呼びつけ、部屋の整理整頓を任せている。
失せ物は槇抄に聞くが早い。などと、からかいながら称したのは、臥笙（がしょう）である。

「それで、わたしに見せたいという文とは？」

床を這うようにして、槇抄は書物を一冊、また一冊と拾い集め、積み重ねながら緋鶯に問うた。
彼が視線を落とすと、長い睫毛が目の下に影をつくる。
色の白い顔だからこそ余計、影が濃く目立ってしまうようだ。その影を眺めながら、緋鶯は己の顎に手を添える。

「奔帷（ほんい）からの文だ。壬州の乱の鎮定しろと言ってきた」
「壬州では今、大規模な乱が起きているようですね。１００万をも越える反乱軍だとか」
「そうだ」
「緋鶯様の兵は、１万と５千」
「勝てるか？」
「勝つしかございませんでしょう？」

緋鶯が渕州斉郡の太守となって、半月が経っている。
緋鶯が青純血の皇女を娶ったことは世に知れ渡り、また斉郡の乱を鎮定した功績もあって、緋鶯の下には人が集まりつつある。

とはいえ、壬州の乱は１００万だという。
鍬を手にした農民が乱の主力だと言っても、１００万という数に挑むには、とてもとても兵力が足りなかった。

槇抄は書物をひとつの場所に積み重ね終えた。
次は緋鶯が書き損じた紙くずを拾い集める。
拾い上げた紙の下から、墨がついたまま床に放置された筆を見つければ、眉間に深く皺を刻んだ。

「緋鶯様っ。何度、申し上げれば筆を粗末にされなくなるのです！」
「おおっ、失くしたと思ったら、そんなところにあったか。でかした、槇抄！」

声を荒げれば、同じだけ大きな声で言い返される。
槇抄はたちまち諦めの気持ちが胸に湧いて、緋鶯を諌める言葉を呑み込んだ。
すると、もう一本、放置されたままになっている筆を見つけてしまい、大きくため息をついた。

「どう考えても兵力が足りません。そこで、併州赴郡の太守に助力を求めてみては如何でしょうか」
「赴郡の太守に？」
「併州は壬州の東南に位置し、赴郡は渕州にも壬州にも接する郡です。壬州の乱が長引けば、いずれ赴郡にまで飛び火することでしょう」
「その前に乱を鎮定するから、兵を出せと？」
「はい、そのような書状を届けるのが良いかと」

「まるで脅迫だな。――それで、赴郡の太守は誰だ？」
「徐貞糺（じょていきゅう）です。小心者だと聞いていますので、強く脅せば否とは言わないでしょう」
「うむ…」

戸口付近から片付けを始めた槇抄が、ようやく緋鶯の近くまでたどり着いた。
緋鶯の周りには、大きく広げられた竹簡が散乱している。
それらは緋鶯が現在とくに重視して行っている政（まつりごと）であるため、槇抄は内容を確かめながら分類して片付けていく。
そして、最後の竹簡をあるべき場所に置くと、槇抄は緋鶯の正面に座した。

「されど、貞糺に兵を出させることに成功しても、まだまだ兵力はたりません。申し上げにくいのですが、我が軍には遊んでいる兵がいますよね？」
「あれは俺の兵であって、俺の兵ではない」
「存じ上げています。蒼夫人が冱斡（ごかん）から連れてこられた兵だとか」

蒼夫人とは、緋鶯が先日新しく娶った妻、天連（てんれん）のことだ。
天連は父親から騎兵を二百と歩兵を五百を譲り受け、緋鶯のもとに嫁いできた。
それらの兵たちは緋鶯の軍営にありながら、天連の勅命でしか動かない、緋鶯にとってどうすることもできない兵であった。
緋鶯は話を打ち切るように片手を大きく横に振った。

「あれらは無いものとして考えろ」
「そうですか。ただ飯食らいですね。口惜しいです」

嫌味っぽい口調で言い放った槇抄は、暗に蒼夫人に伺いを立てろと、緋鶯に告げている。
1人でも兵が欲しい時期なのだ。
蒼夫人さえ首を縦に振ってくれれば、二百の鍛えられた騎兵と五百の歩兵が手に入る。
何か言い返そうと、緋鶯が口を開いた時、槇抄が短く声を上げた。

「ありました。お探しの文はこれですね？」

差し出された紙は、たしかに奔帷から送られてきた文だ。
だが、その文に書かれた内容はすでに槇抄に話してしまっている。
もはや用は済んだと緋鶯は槇抄を下がらせた。

光差す刻　衣脱ぎ捨てる　弐

「なんだって？」

半月ぶりに緋鶯は天連を訪れた。
斉郡に入ってから多忙を極めた緋鶯は、天連に斉郡城の一室を与えたきり、その存在を忘れたかのように天連のもとを訪れることがなかったのだ。
おかげで天連は、緋鶯の妻を演じる必要がなく、男装姿で気ままな暮らしを送ることができていた。
ただひとつ。与えられた部屋から出ることができない不自由さを除いて。
天連は己の正面に座した緋鶯を見やりながら、盛大に眉を歪めた。

「兵力が足りない？　それで、俺の兵たちを貸せと？」
「そうだ」
「嫌だな。断る」
「断る？」

断るなど信じられないという表情で緋鶯が見やれば、天連もそのような表情を浮かべられること事態、信じられないといったように彼を見つめ返した。
しばし睨み合い、重たい口を開いた天連は、端的に言えば、ひど

く怒っていた。
苛立ちを隠さずに突き放した物言いをする。
「あれは俺の兵だ。父上が、俺の覇道のためにくれた力だ」
「覇道だと？」
「玉座を手にすると言った」
「そのための力は、俺がなると言ったはずだが？」
「そうだ。言ったな。そして、お前はこうも言ったはずだ。冱斡以外の地の馬を俺に贈ると。冱斡の地の外を見せてくれると。教えてくれると言ったはずだ。俺が望めば！」

ところが、どうだろうか。
天連はこれほど長く部屋に籠っていたことなど、未だかつてない。

「ここ半月、俺は屋敷の外に出ていない。一歩もだ。馬にだって乗っていない。剣を振るうことも、弓を引くこともなく、毎日毎日、部屋に籠もって過ごしてきた」
「何が言いたい？」
「これでは死んだも同然だってことだ！　俺はあんたに蒼家の血を与えてる。おかげで、あんたの下には人が集まって来ているのだろう？　だったら、あんたは俺の血の代わりに、俺の望みも適えてくれよ。そうだろう？　――なのに、あんたは、先の戦にだって一人で行ってしまうし。壬州にだって、俺を置いていくつもりなんだろう！」
「壬州に連れて行けと？」
「俺の兵は俺が動かす」
「馬鹿なっ」

「馬鹿？」

言われた言葉の意味を捉えかねたように、天連は眉を歪めた。
そして、今にも飛びかからんばかりに緋鶯を睨んだ。
ため息が漏れる。緋鶯の口元からだ。

「今、お前に死なれたら、元も子もない」
「俺は死なない！」

天連には自信があった。剣も、弓も。馬だって。
拳を握り締めて、天連が身を乗り出すと、緋鶯は片手を振った。
分かっている、と。

「だが、お前はまだ１３だ。戦に連れて行くのには早すぎる」
「いいんだよ、早くて！　俺にはそれで調度良いんだ！」

ダンッ、と床を拳で叩き、立ち上がる。
睨むように、緋鶯を見下ろした。

「俺は１３の時に元服した。初陣だって、人より早くとも構わないだろ！」

青帝国では、一般男子が成人するのは２０歳になってからである。

それを13とは、ずいぶんと早い。
皇族や王侯は例外的に早いとも聞く。早く成人する理由が、それなりにあるからだ。
天連にもその理由があり、時代に追い立てられるように成人したのであろう。
だが、緋鶯にとって、天連が成人していようが、いまいが関係がなかった。何度も頭を横に振る。

「何度も言うようだが、お前が死んだら元も子もない。もしも、お前が戦場で命を落としたら、俺はどうなる？　今、俺の下に人が集まってきているのは、お前が先ほど言った通り、青純血であるお前を俺が妻にしているからだ」
「青純血の娘が緋鶯の妻になったという事実は、すでに皆の知るところとなっている。そして、青純血の娘――天連は、緋鶯の妻であり続けるだろう。万が一、俺が戦場で死んでも、それは一人の少年が死んだに過ぎない。今はまだ名もない少年の死であって、天連の死ではない。なぜなら、緋鶯の妻が戦場にいるはずがないからだ」
「お前、自分が何を言っているのか分かっているのか？　自分が戦場で死んでも、その死を伏せて、生き続けていることにしろと？」
「そうだ。それなら、緋鶯に損はないはずだ」

損はない。
緋鶯の妻が死なないのであれば、たとえ、戦場で一人の少年が死んだところで、緋鶯にはまったく損害はないのだ。
それどころか、冱斡の兵を動かせるようになり、これまで彼らを養うだけの無駄な兵糧を失くすことができる。
戦わない兵に食わせる物などない、と言っていた槇抄の顔が綻ぶ様子が脳裏に浮かんだ。

今度の敵は１００万。今は一人でも多くの兵が必要な時だ。

だが、しかし。

そうだと頭では理解できていても、まったくもって気が進まなかった。

なぜだろうか。はっきりとした理由はない。

ただ、無性に、天連を戦場には出したくなかった。

同じ男だと主張する天連は、彼自身がそう言っているほどに、緋鶯には『同じ男』には見えなかったのだ。

腕を掴めば片手で覆えてしまうほどに細い手首だ。

容易く折れてしまいそうな首。

――こんなヤツ、簡単に殺せてしまう。

そう思った瞬間。かっと脳天に血が上る。

気が付けば、天連に向かって大きく踏み込んでいた。

逃れる術なく、捕らえられた少年は、襟元を掴み上げられ、足が空を蹴る。

「くっ」

咽を締め付けられ、苦しい息が漏れた。

自分と目線を同じにする程、天連を高く高く持ち上げた。

細めた目で見やれば、上気した天連の顔が、ごく近くで確認できた。

きつく食いしばった歯の奥で、緋鶯は舌打ちをする。

ドスン、と鈍い音を響かせ、小さな躰を床に叩き落とすと、苦々しく言葉を吐き出した。

「そんなに死にたくば、死んでしまえ！　戦場で、朽ち果てればいい！」

床を踏みならし、けたたましく戸を開く。
遠くで控えていた者が、何事かと駆け寄ってくる。
それを認め、大声を張り上げた。

「汐銚（せきちょう）！　汐銚を呼べ。すぐにだ！」

光差す刻　衣脱ぎ捨てる　　参

汐銚は、緋鶯の従兄であり、右腕とも称される将軍である。

緋鶯の祖父は、宦官である。

そのため、親戚筋に当たる薪(しん)家から養子を取った。緋鶯の父だ。

緋鶯の父には兄がいて、その兄の息子が汐銚とである。

この5つ年上の従弟を、緋鶯は誰よりも深く信頼していた。

幼い頃は、実の兄のように慕っていたもので、剣も、矢も、初めは彼から習った。

汐銚の方も、緋鶯を実の弟である臥笙よりも可愛がり、緋鶯の成長を誰よりも楽しみに見守っていた。

そして、緋鶯の成人後、彼の前で膝を折って見せたのである。

幼い頃から緋鶯の器を知り、その力を知り、見つめる物の大きさを知っていた汐銚だ。

自分の命や将来、すべてを彼に委ねようと、ずっと心に決めていたのである。

午前評議の後は、新兵たちを率いて城外に出、鍛錬をするのが、この頃の汐銚の日課となっていた。

斉郡城の外には兵士たちを鍛えるのに丁度良い平地が広がっている。

この日も、汐銚は新しく緋鶯軍に加わった新兵たちを率いて平地を駆っていた。
槍を振るう訓練を指示している時だった。緋鶯が汐銚を呼んでいるとの知らせを持った使者が現れた。
汐銚は思わず、空を仰いだ。日はまだ高い。ほんのわずかに、西方に傾いている程度だ。
このような時刻に自分が何をしているのか知らない緋鶯ではないはずだが、それでも自分を呼びつけるとは、何かあったに違いない。
汐銚は新兵達に休みを与えると、馬に跨った。

斉郡城に戻ると、息を付く間もなく、即座に緋鶯の元へ駆け付ける。
待っていたのは、いかにも不機嫌そうな顔。汐銚は、ぐっと息を詰めた。低く咽を唸らせる。

「不幸を招きそうな顔をしているぞ。緋鶯」
「……この顔は生まれつきだ」

揶揄して言えば、少し和らいだようである。
フッと笑みを零して、緋鶯は汐銚を部屋の中へと招き入れた。
部屋の中に人影を見つけ、誰かいたのか、と汐銚は躊躇する。
見覚えのない顔だ。この年若い少年は、いったい誰だろうか？
部屋に入ると、床に腰を降ろしながら、それで？と緋鶯に尋ねる。
緋鶯は気怠そうに腕を伸ばした。
少年を指差す。

「こいつをお前の下に置く」
「この者は？」
「天連だ」
「天連？　姓は？」
「蒼だ」
「は？」

蒼姓は、皇族にしか許されていない。
驚いて少年の方を振り返れば、汐銚はさらに驚くこととなった。
少年の青い瞳と、目が合ってしまったからだ。

「青純血か……。いや、そんなはずがない」

青い瞳は、青純血と呼ばれる、最も玉座に近い者だけが持てる瞳だ。
そして、その存在は、青帝国において最上に尊い。
まさに天上の人とも言える青純血が、己の目の前にいることが汐銚には信じがたいことであった。

「蒼夫人の身内の者か？　いや、たとえ、そうだとしても、青純血の男子がなぜここにいる！？」
「……」
「緋鶯、これはどういうことだ！　説明しろ。まさか、お前。蒼夫人の他にも青純血を冱斡から連れ攫ってきてしまったのか！」
「落ち着け、汐銚」
「これが落ち着いていられるか！」
「青純血の男子が、そうそうたくさんいて堪るか。まして冱斡の地

に」
「では、そこの少年の青い瞳は、どう説明するのだ！」
「青純血だ。汐銚、俺の妻の名前を思い出さないか？」
「お前の妻の名前など知らぬわ！」

この時代、女子の名はよほどのことがない限り、世間の耳には入ってこないものである。
皇女としての天連の名前も例外ではなく、冱斡の地に飛ばされた不運の廃太子の娘としか、世の人は知らない。
そして、緋鶯の妻となった以降は、皆、天連を蒼夫人としか呼ばないのである。
緋鶯は面倒臭そうに、天連を指さし、一語一語、区切るようにして天連の名を汐銚に告げた。

「蒼、天、連。――俺の妻だ」
「はぁ？」
「こいつを、お前の配下に置け」
「正気とは思えん！」
「同感だな。だが、他に頼める者がいない。皇女として扱うな。そこらの餓鬼だと思って使え」
「使えるのか……？」

主君の妻を使える使えないなど、とんでもないことだと思いながらも、汐銚は緋鶯に問い返した。
緋鶯は苦笑を漏らす。

「本人曰く、剣も弓も、馬も、得意だそうだ」
「ほぉー」

汐銚は信じがたいと、天連をまじまじと見つめた。
緋鶯の妻だと知ったせいだろうか、先ほどまで少年だと感じていた体は、見れば見るほど細く、まるで少女だ。
青純血だと思えばこそ、儚くさえ思えた。

「お前はなんという重荷を俺に預けるのだ」
「信頼している」

そう、緋鶯が汐銚を呼び付けたのは、彼を一番信頼しているからである。
天連に対して、勝手にしろ、と言ったものの、言葉通りに戦場に放り出すわけにはいかなかった。
死んでも損はないとは言ったが、本当に死なれては目覚めが悪い。

まして、緋鶯軍の兵の一人となるのであれば、勝手な行動を取らせるわけにはいかない。
軍に加わるからには、軍に従って貰う必要があった。
軍の掌握は汐銚に任せていた。
汐銚の下に数人の将軍がいるが、彼らに天連を任せる気はなかった。従弟の臥笙にさえ、天連は預けられない。
頼むとなれば汐銚、唯一人だろう。

「天連には、冱斡から連れてきた兵を率いて貰う」

「騎兵二百、歩兵五百か？」
「そうだ」
「たしかに、あれらは蒼夫人の命令にしか従わないだろう。そうか、あの兵たちをついに使うのか」
「使えるものは、全て使う」
「……わかった」

深く頷き、ようやく汐銚は天連から目を逸らした。
ゆっくりと腰を上げる。緋鶯を見、再び天連を見やった。

「蒼夫人、これからすぐに訓練に出られますか？」
「天連と呼べ。敬語もいらない。――今日から加わっても良いのか？」
「構いません。――ですが、まずは口の利き方をお互いに覚える必要があるかもしれませんが」
「すぐに支度をする！」

だんっ、と床を叩くように手を着き、立ち上がると、天連は汐銚の脇を抜け、戸を乱暴に押し開いた。
ばたばたと廊下を駆けていく音に、汐銚は眉間に皺を作った。

「蒼夫人……天連の年はいくつだ？」
「13と聞いている」
「まだ幼い」
「本人は大人だと言っている」
「だがな、緋鶯」

「使えるものは使うしかない。それが、現状だ」

敵は百万なのだ、と緋鶯は続ける。
汐銚は言葉を失くすしかなかった。

剣振るう刻　空を駆けよ　壱

天連（てんれん）の腕は、汐銚（せきちょう）の想像以上であった。
天連と剣を交わらせながら、汐銚は舌を巻く。
何と言っても、動きが速い。躰が軽いからだろう。その小さい躰が消えたと感じる時もある。
冱斡国から連れてきた兵を率いさせてみたが、これも見事に動かした。
調練中の新兵を汐銚が率いて戦わせれば、天連はこれを見事に撃ち払った。
千や二千の兵ならば自在に動かせるようだ。だが、それ以上となると、無理だろうと汐銚は見た。
将の器ではない、と。
だが、帝王の器かもしれない。そう思ったのは、調練を終えて、斉郡城の緋鶯（ひおう）の居室に寄った時だった。
緋鶯は女に頭を揉ませていた。
彼は汐銚の姿を認めると、片手を振って、女を下がらせた。

「どうだ？」
「天連のことか？」
「ああ。あれは使えるか？」
「予想以上に」
「そうか」

久しく緋鶯とは剣を交わらせていないが、あの剣は緋鶯と似ている。

迷いのない剣。
己の力を十分に知っており、それを最大限に利用した動きをする。
強いか、弱いかと言えば、けして強くはない。
だが、負けはしない。屈する事のない何かを秘めている。
そして、それは、誰かを守る剣ではない。自身の志を貫く剣だ。

緋鶯にしても、天連にしても、こういった剣を持った者を服従させることは容易ではない。
事実、天連には緋鶯に対する忠誠心がまるでないように思えた。
――妻であるのに、だ。
二人がいったいどういった夫婦関係を結んでいるのか知らないが、いったい、いつまで天連が緋鶯の妻で甘んじていられるか、空恐ろしいものを感じる。

――厄介な餓鬼を押し付けおって。

汐銚は緋鶯に、呆れたような目を向けて、苦笑した。

「予想以上にできるもんでな、少し手荒く扱ってしまった。幾つか傷を作ったはずだ。これを、蒼夫人にお渡ししてくれ」
「蒼夫人ではない。天連だ」

言いながら、汐銚が差し出した貝殻の器を緋鶯は受け取る。
器には緑色の塗り薬が入っていた。緑と言うよりも茶色。黒に近い。
ツン、と鼻を刺激する臭いがして、緋鶯は頷く。

都でも使われているという傷薬だ。噂通りよく効くので、緋鶯も使用している。
天連が汐銚の下で調練に参加するようになって、数日が経つ。
再び足が遠のいてしまった天連のもとに、この傷薬を理由に訪れてみるのもいいかもしれない。
緋鶯は汐銚を下がらせると、目を通していた書物を床に放り、天連の居室に向かった。

緋鶯が天連の居室に出向くと、丁度、天連は傷の手当てをしているところだった。
部屋の入り口――扉から入ってすぐのところに、大人の背丈程の衝立が立っている。
部屋は三間続きで、分厚い布で仕切ってある。
衝立の陰から姿を現した緋鶯は、布をたくし上げ、天連の前までやって来ると、腰を下ろした。
天連は、簡単に腰布を巻き、剥き出しの肩に薄い衣を一枚羽織っているだけで、ひどく無防備な姿を晒していた。

「汐銚は加減しなかったらしいな。良いことだ」
「おかげさまで、傷だらけだ。文句はないけどね」

天連が口角を引き上げると、緋鶯は手を突き出す。見せてみろ、と言うと、天連はわずかに身を引いた。

「もう手当は済んでいる」
「黙って見せろ」

天連が広げた距離だけ、緋鶯は膝を進める。
仕方なく、天連は先程羽織ったばかりの布を滑り降ろした。
緋鶯が息を漏らした。

「ずいぶんとやられたものだ」

全身、青あざだらけだ。
こちらは傷薬を塗るよりも冷やした方がいいだろう。
少年特有の滑らかな肌に切り傷を見つけると、緋鶯は目を細め、懐から小瓶を取り出した。

「都の薬だ。これ以上に効くものはないだろう。使え」
「……ありがとう」

確認するように蓋を開けた天連が顔を顰めた。
ツン、と鼻を刺激する臭いに対する嫌悪感がそのまま顔に出てしまったのだろう。
緋鶯は笑った。

「塗ってやろう」
「いい。手当ては済んでいると言った」
「だが、お前はそのままそれをしまい込んでしまいそうだ」
「うっ」

天連の考えが容易に分かった。素直すぎるのだ。すべて表情に出ている。
微少を浮かべながら緋鶯は天連の手から瓶を奪い返すと、中の物を指先ですくった。
天連の腕を引く。躰を引き寄せると、肌に指を滑らせた。

「痛っ」

天連の頬に赤が走った。息が殺す気配がする。
相当傷に染みたのだろう。

「っん」

わずかに肉の抉れた肩。
打たれ、青痣となっている背。
切り傷、擦り傷も全身に散っていて、それら全てに緋鶯は指を滑らせた。
従兄に打ち負かされた経験は緋鶯にもある。故に、天連の痛みは、緋鶯自身も経験がある痛みだ。如何ほどに染みるのかは、容易に想像付く。傷に針を突き刺す痛みだ。
天連が痛みに顔を歪ませ、縋るように緋鶯の背に腕を廻し、肩に額を押し付けてきた。

「……あ。痛っ」

長時間の激しい乗馬の為、鞍で擦れた股にはうっすらと朱が滲んでいる。
緋鶯はそこにまでも手を滑らせていた。
そして、ようやく緋鶯の指の動きが止まった頃には、天連の躰はグッタリと彼にもたれかかっていた。
苦痛に耐えたこともあったが、過度な運動で疲労した躰だ。仕方ないことだろう。意識の無い体を抱き上げる。
ふと、気配を感じて振り返る。天連の侍女が家具の影のように控えていた。
いったいいつからそのようにしていたのだろうか。
天連の母親ほどの年齢のその侍女は、緋鶯の腕の中に眠る主を一瞥すると、静かに口を開いた。

「今夜はこちらでお休みですか？」

一瞬、緋鶯は驚きの表情を浮かべた。
思いがけない問いだった。だが、考えてみれば、天連は自分の妻だ。
天連の部屋で緋鶯が休んで何の支障があるだろうか。
むしろ、婚姻を結んでまだ日が浅いというのに足が遠のいている今の状況を世間に知られ、無用な噂を流されても厄介だ。
緋鶯は侍女に頷いて見せる。

「そうだな。今夜はそうしよう」

「では。そのように」

侍女は緋鶯に一礼し、奥にある寝室に向かうと、しばらくして戻って来、支度が整ったことを告げた。

緋鶯は天連を抱き直すと、寝室に移動し、綺麗に整えられた寝台の上に幼い少年の体をそっと横たえさせた。

剣振るう刻　空を駆けよ　弐

半年が経った。
あの日から、緋鶯は毎晩、天連の部屋を訪れている。
天連が絶えず新たな傷を拵えてくるからだ、と緋鶯は言っているが、本当のところは天連にはよく分からない。
薬くらい自分で塗れる。そう言っても、緋鶯はやってくるのだから。
当初、緋鶯に肌を触れられるのを嫌がっていた天連だったが、毎晩しつこくされていれば次第に慣れてくる。
どうせ逆らっても無駄なのだから、自ら衣を脱ぎ捨てるようにまでなる。
そして、薬の痛みにも慣れ、調練の厳しさにも慣れた頃からは、手当後に寝室で語らうようになってきた。
これではまるで仲の良い夫婦だ。
共に寝室に寝転びながら、そんな風に思って、天連は眉を顰めた。

天連の寝台は3畳ほどの広さがある。
一人で寝る分には、両手両足を存分に伸ばしても、何の妨げもなく眠れる広さである。
ところが、今はすぐ隣に緋鶯がいる。
目覚めた時、瞼を開けばすぐ目の前に男の顔があるなど、とんでもないことだ。
だけど、それさえ、しだいに慣れつつ自分がいる。

「なぁ」

天連は寝起きの掠れた声を漏らした。緋鶯もきっと目覚めているはずだ。
侍女が起こしに来るまで時間がある。こういう時は目覚めていても、侍女がやってくるまで寝台から降りずに待っている方が、侍女たちにとって『良い主』なのだ。
天連は緋鶯の瞼が開くのを待って、ここ数日、胸に抱えていた疑問を尋ねてみることにした。

「なぜ、動かないんだ？　壬州鎮定の命を受けてから半月が経っている」
「今は駄目だからだ」
「駄目？　なぜ？」
「収穫がある。兵の大半が農民だ。農民は、田植えの時期と稲刈りの時期は、土地にいなければならない」

なるほど、と思う。季節は秋になっていた。
天連は寝転んだまま、じっと緋鶯を見つめた。

「では。稲刈りが終えたら、兵を進めるのか？　すぐに冬になってしまうのでは？　壬州は斉郡よりも北だ。雪が降ったら、動けなくなる」
「そこが狙いだ」
「ん？」

少し考えてみるが、やはり分からない、と首を振った。

緋鶯は深く息を吐き出した。

「壬州で乱を起こしているのは農民だ。農民が田を耕さずに、武力を持とうとしている。鍬を、田を耕す道具としてではなく、武器として扱っているのだ。それで田はどうなる？」

「荒れる」

「米は採れまい。農民が田を耕さねば、食う物がなくなる。戦でもっとも重要なことは、兵糧の確保だ。彼らにはそれができまい」

「飢えさせる気か？」

「寒さは飢えを増す。だから、冬の到来は都合が良い」

「なるほど」

大きく頷くと、緋鶯は息を漏らした。

天連から目を逸らし、天井を睨み付ける。

「天連。俺がこれから戦おうとしている者たちは、本当に敵か？」

「え？」

「敵というのは、瓊奔帷（けいほんい）。奴のような者を指すのではないか？」

意味が分からないと、天連は体を起こし、寝台の上で胡座を掻いた。

緋鶯の顔を見やる。　その瞳に映るものを見ようとするが、天連には何も見えなかった。

「お前の言っている意味が分からない」

――悔しい。
天連は唇を噛み締めた。拳を作る。

「……だけど、分かりたいとは思う。俺は、言って貰わないと分からない。だから、説明が欲しいんだ」

ジロリ、と緋鶯が目を向けてきた。怯んでしまいそうになる程、鋭い光を放つ。
緋鶯は人に問われることを好まない。
あれこれ尋ねて、追い出された者を数人知っていた。　ある者など、問うて首を跳ねられたのだと言う。
その者は軍師だったという。

――軍師とは先を読むものだ。現在立てている策について、その意味を、あれこれ問うとは何事だ。君主が軍師に問うことはあっても、軍師が君主に問うものではない。よって、汝、軍師にあらず。

無用な存在だ。首を跳ねろ、ということになったと聞いている。
それでも、自分だけは、彼に問うことを許される気がした。
そもそも、天下を見せてやる、教えてやると言ったのは、彼自身なのだから。
しばらくの沈黙後、ようやく緋鶯は口を開いた。

「お前は、農民反乱を鎮定するとは、いったいどういう状態にする

ことを言う？」
「へ？」
「乱を起こしているのは農民だ。１００万の農民を皆殺しにでもするつもりか？」

天連は閉口した。

「壬州で乱を起こしているのは、壬州の民だ。民が無くて、国は成り立たん。国無くして、君主無し」
「壬州の反乱軍を皆殺しにしたら、壬州は滅ぶ？」

何となくだが、見えてきた気がした。
緋鶯は彼らを敵として扱わないつもりなのだ。闘う気がない。
では、どうするつもりなのだろう？
不意に緋鶯の目が細められた。

「斉郡は今年、豊作だということだ」

そう、零すように呟いた。

▽
▲

風が吹いた。
肌を刺すような冷たい風だ。北から南へと吹き抜けていった。
軍議が開かれたのは、それから数日後のことだ。
天連も後方に参列した。緋鶯の顔すら見えない位置である。
不満はなかった。参列できたことだけでも、天連にとっては驚きだったからである。
よもや13という年齢で、この場に並んでいる者は他にあるまい。
そう思い、辺りを見渡す。
その時、視線を感じた。振り向けば、驚いた顔と目が合う。天連も目を見開いた。
わずかに年上だろうか。同い年くらいの少年が天連とは反対側の列に並んでいた。
しばし、互いに互いの若さに驚く。先に目を逸らしたのは向こうだ。
緋鶯の声が響き、天連もそちらに振り返った。
いよいよ壬州に兵を向ける。　一人一人名を呼ばれ、任を与えら

れた。

先陣は汐銚。

ならば、その配下として天連も組みすることになるのだろう。

そう思っていた時だった。

天連の名が呼ばれる。自分のことだと気付くまで、時間を有した。

緋鶯の声が響く。

「天連。斉郡城で待機を命じる」

「はぁ！？」

思わず、声を上げたのは、耳を疑ったからだ。

汐銚は咳き込み、緋鶯はジロリと天連を睨んだ。

その眼の鋭さに、天連は反論の言葉を無くす。

「……御意に」

一礼し、引いた。

存分に睨んだ後、緋鶯は視線を天連と対する位置にいる少年の方に移動させた。

「柢恵（ていけい）。斉郡城の守りを命じる」

「はっ」

即座に返答した少年は、どうやら柢恵という名らしい。
身に纏っている物から見て、文官のようだ。
続けて、緋鶯は言い放った。

「天連は、城に待機している間、柢恵の下に置く」
「はぁ！？」

再び耳を疑う。　今度も、ごほんっと汐銚が咳をし、緋鶯が睨む。
人々がざわめいた。あれは誰か、と囁く。

「天連。柢恵に従え。良いな！」
「……」

蒼夫人の縁者らしい。青い瞳をしているぞ。では、青純血か？
だが、王位に着ける立場にないらしい。そんな囁きの中、天連は
黙って頭を下げた。

剣振るう刻　空を駆けよ　　参

「なぜですか？　なぜ、わたしは待機なのですか？」

軍議の後である。
まさか緋鶯に噛みつくわけにはいかず、直属の上将である汐銚に食い付いた。
彼の背を駆けるように追う。

「薪将軍！」

彼は天連を振り返りもせずに、回廊を進んでいく。
左手に庭が広がっている。大きな池があり、橋が架けられている。
その橋を覆うように茂っていた草花はすでにない。直に冬が来る。
枯れ葉がどこからともなく舞ってきて、天連の頬を掠めた。

「薪将軍！」
「殿が決められたことだ。従え。お前はここで待機だ」
「そんな……」

汐銚は緋鶯の従兄であり、彼の臣ではあるが、字で呼び合う仲である。
だが、けじめを重んじる質で、人の前では緋鶯の臣下に徹しているため、名前ではなく、殿と呼んでいた。

「お前はまだ幼い。柢恵もな。幼い故に守りを命じられた」
「そうそう。そいつ、何者なんですか？　なんで、わたしがあんな子供の下に付かなければならないんです？」
「子供？　儂から見れば、お前も柢恵と同じくらいに餓鬼だ」

天連は、軍議で見た細く頼り無げな少年の面差しを思い出して、地団太を踏んだ。
自分はあんなにも軟弱ではない！
汐銚を追って回廊の角を曲がれば、その先を行けば邸の外に出てしまう。
彼は天連の訴えを無視して、自分の居邸に戻るつもりなのだろう。

「彼の年は？」
「１４だ。――賢い餓鬼でな。鮮郡の生まれだが、噂を聞きつけた殿が、陣営に加えるために、わざわざ出向いた程だ。たしか、柢恵が１２の時だった。半ば強引に連れてきて、柢恵の父親に訴えられた」

思い出したのか、高らかに笑う。

「人攫いだ、と」
「人攫い？」
「話を聞けば、名を尋ね、柢恵だと答えたので、馬に担ぎ上げたらしい」
「……」
「そのまま霖国の自分の邸に連れ帰ったとか」
「それは間違えなく、人攫いだ」

呆れた、と天連は肩を竦めた。
汐銚も同じ思いらしく、苦笑する。
だが、柢恵がただの餓鬼ではなく、賢い少年であり、緋鶯が彼を重く見ていることを天連に伝わったと分かると、苦笑を穏やかな笑みに変えた。

「今回の戦、柢恵を連れて行かないのは、今はまだ彼を失うわけにはいかないからだ。殿は先のことも考えている。柢恵を使うのは今ではない。もっと先だ」

汐銚は足を止め、天連に振り返った。
未だ天連に燻る憤りを押さえ込むように、肩に手を置く。

「お前も柢恵と同じだ。お前の働く場は今ではない。先にある」
「だけど……」
「加えて、お前は緋鶯の正室、蒼夫人だ。お前を失うわけにはいか

ないのだ」
「……」
天連が言うべき言葉を失い、口を閉ざせば、汐銚は背を向けて、片手を振った。
そのまま振り返ることなく、己の居邸へと去っていった。
汐銚の背を見送ってから、天連は斉郡城内にある緋鶯の私邸の方へと身を翻した。

▽▲

緋鶯が軍を率いて壬州に出発してしまうと、城内は耳が痛いほど静まり返ってしまった。
緋鶯邸から城門まで、誰一人として出会うことなく行き着くことができた程だ。
城門に来ると、門兵が立っていて、ようやく人の顔を拝むことができる。
斉郡に残った兵は、天連が冱斡（ごかん）の地から連れてきた兵がほとんどで、騎兵が二百、歩兵が五百である。
柢恵も三百の兵を預かっているらしく、冱斡鈍りのない兵を時折

見かけた。
　柢恵とは、出陣する緋鶯を見送ったその足で彼の居邸に赴き、会った。
　今後の――緋鶯が帰還する、もしくは天連が戦場に呼び寄せられる時までのことを話し合うつもりであったが、お互い、すぐに言葉が尽きてしまい、半刻で天連は席を立った。
　年頃は同じであったが、天連が外を駆け回って育ったのに対し、柢恵は室内で読書をして育った具合だ。
　共通する趣味もなく、必要最低限の会話しかできなかったのである。
　事は夜更けに起きた。人の気配で目覚め、天連は寝台を降りる。

「お休みのところ申し訳ございません」
「何かあったか？」

　寝室に入る許可を出すと、侍女が慌てた様子で姿を現した。
　すぐに具足をつけるようにと、天連を促す。
　天連が武装して、斉郡城の主殿に出て来ると、すでに柢恵が待っていた。

「いったい何が？　緋鶯に……、殿に何か遭ったのか？」
「赴郡の動きが妙だ。殿の要請通り、壬州に兵を向けたようなのだが、どうもその動向が……」

　赴郡とは併州の内にある郡だ。
　併州は渕州の南、琲州の北に位置し、その二つの州に挟まれるよ

うに存在している。
また、赴郡は併州の北方に位置しているため、壬州にも渕州斉郡にも接していた。
その赴郡の太守を、貞糺（ていきゅう）といった。

「貞糺か？」
「ああ。貞糺が壬州に向けた兵は5千。赴郡に3千の余力を残していた。その3千が斉郡を攻めてきている！」
「なんだと」

ばらばらと、主殿に人が集まってきたので、柢恵が広げた地図を囲うように皆で座った。

「先程、殿に早馬を送ったが、それが殿に追い付くまでに2日かかるだろう。それからすぐに引き返したとして、殿が戻ってくるまでに、4日はかかる」
「赴郡から斉郡までの距離を考えれば、貞糺の軍は、あと2日もあれば辿り着く！」

緋鶯は間に合わない。どう見ても、それは確かだった。
彼は今、休み無く馬を駆けさせて2日の距離にいる。
1万を超す軍を率いて移動すれば、4日かかる距離である。
――対して、赴郡から斉郡に攻め寄せてくる3千の兵は、百二十里。
3千の兵が足並みそろえて2日で進める距離にあった。

加えて、赴郡から壬州に向かったはずの5千の兵は馬首を翻し、斉郡に向かっているという。斉郡から百五十里の距離にいる。

「3千は、2日後の夕刻には姿を現すだろう。その翌日には5千が。殿の到着は更に3日後となる」
「現在、斉郡には騎兵が2百。歩兵が8百。――何とかなるか？」
「正面切って闘えば負ける。壊滅するだろう。だが、この城は守りに適した城ではない。籠城することもできない」
「たかが4日も持たないか？」
「持たないだろう」

天連は親指の爪を噛んだ。

――手はないのか。何かできることは。

柢恵の指先が床を突いた。数回。とんとんとん、と。軽い音が響く。
つと、天連を見やる。
静かな瞳だった。細められ、どこか冷ややかな光を放つ。

「何か手があるのか？」
「ここに蒼夫人がいらっしゃらなければ」
「蒼夫人？」
「お守りする必要のある方がおられる限り、無用な策だ」
「いったいどんな？」
「言う意味がない。無用だから」

天連はガチッと歯を噛み合わせた。拳を作る。

「自分の胸だけにしまっている策はもっと無意味だ。人に言わねば、意味をなさないのも当然だろう？　無用か否かをお前だけで判断するな」

「……分かった」

柢恵は片手を振った。

それは、初めから、天連が言うだろう事を予想していたかのような仕草だった。

天連は舌打ちをした。

「それで？」

「城に火を放つんだ」

「火？」

「まず天連殿は貴方の兵を率いて城から出て頂く。そう、まるで恐れをなして逃げ出したかのように」

「逃げる？」

天連は眉を寄せた。

「敵はこちらが逃げたと思い、油断し、斉郡城にやってくる。敵が入城したところを、わたしの兵三百が油を注ぎ、火を放つ。当然、敵は混乱するだろう。そこに逃げたと思わせた貴方の兵が後ろを突

く。そうすれば、まず2日後にせめてくる3千の敵はどうにかなるだろう」
「次の5千はどうする？」
「先の3千の敵を壊滅させたら、すぐに城を出るんだ。今、赴郡には兵がいない。3千は壊滅。5千は斉郡。赴郡を守る兵はいないだろう」
「つまり？」
「赴郡を攻める絶好の機会だ」
「なるほど」

天連が柢恵を見やると、彼の目が鋭く輝いた気がした。

「斉郡は捨てることになるが、一時的なことだ。すぐに殿が兵を率いて戻ってきてくださる。奪還できる。――それに、先の3千をやり過ごすために火を放った城では、次の5千はどうすることもできない。守り難いものを守るよりも、無傷な赴郡城を手に入れる。その方が犠牲も少ない」

新たな領地も手に入る、と柢恵は笑った。
天連は手を打った。

「良し。それで行こう」
「だから、駄目なんだ」
「駄目？」
「今の策は、蒼夫人がいらっしゃらなければ使える策だと言っただろう？　夫人がいらっしゃるのに、邸に火を放てるか？　城を捨て

られるか？　お守りしなくては」

ああ、と天連は低く声を発した。頭を掻く。そんなことで柢恵は策を捨てねばならないのか、と。

いっそ自分が、その護るべき蒼夫人なのだと告げてしまいたい。

だが、天連が何も告げずにいると、柢恵は再び指先で床を突き始めた。

「夫人を危険な目に合わせるわけにはいかない。別の手を考えよう」

「別の手があるのか？」

「これから考える」

「……」

天連は首を振った。柢恵を見やる。

「今、お前が言った策が最善だと思う。それで行こう。夫人に関しては俺がどうにかする」

「どうにか？」

「任せろ。俺は蒼夫人の身内で、青い瞳を持つ者だぞ。夫人のことは俺がどうにかする」

そう言って天連は立ち上がった。

剣振るう刻　空を駆けよ　肆

▽▲

日が西に傾き始めていた。
遠くの方に土煙が上がっている。赴郡軍がそこまで来ているのだ。
天連は冱斡国から連れてきた兵を率いて、斉郡城を出発した。
馬を走らせ、大げさなほど土煙を立てる。慌ただしく逃げるように演じて見せた。
斉郡城からわずかに離れたところに、潜むのに都合の良い地形が広がっている。
岩場の影に姿を潜ませた。
斉郡城から火の手が上がったのは、それからわずか後だった。
夕日よりも赤く。華やかで、激しい。
柢恵が城に侵入してきた敵兵に、頭から油をぶちまけ、火を放った。
それで半数ばかりの敵兵が焼け死んだようだ。
混乱の中、天連が背後から突く。

柢恵も潜ませて置いた兵で正面から打ち、挟まれた敵兵は二人の前に次々と倒れていった。
炎は、翌日の太陽が昇っても尚、燃え続けていた。

その炎も燻り始めた頃、ようやく敵兵は壊滅した。
額を拭うと、汗と共に血の赤や灰の黒が白い布を染めた。
だが、休む間などなかった。
５千の敵が迫っている。すぐに斉郡城を出発した。
今度は芳詔たち女官も引き連れて、本気で逃げる。
逃げる先は赴郡で、ついでに攻め落としてしまおうと言うのだ。
途中まで共に逃げ、そこから先は騎馬だけを集めた。
赴郡軍が斉郡城で、焼け死んだ仲間の弔いに足止めをくらっている間に、赴郡城を攻め落とさねばならなかった。

天連は二百の騎兵だけを引き連れて、駆けた。
いつの間にか、日付が変わっていた。丸一日を馬上で過ごしたように思う。
難なく赴郡城は落ちた。味方は、たったの二百騎だった。
城内に潜り込んでいた雫石に城門を開けて貰い、後は無駄な血を流すことなく、攻め落とすことができた。
赴郡城に戦える兵はなく、女子ども、老人ばかりだった。
城を落とした翌日、柢恵が残りの兵と女達を率いて入城した。
赴郡軍が斉郡に攻め寄せてから、４度目の夜明けだった。

土煙。視界を隠すかのように、巻き上がる。
風。大気が震える。

2千――いや、千と5百くらいだろう。赴郡城に向かって来る。
あれが貞糺だろうか。大柄な男達に守られた小太りの男がいる。
付きすぎた肉のせいで、目が細く見える。
その眼はどこともない場所を見据え、顔からはすっかり血の気が引いていた。
貞糺軍のすぐ後ろに1万の軍が迫っていた。
緋鶯だ。斉郡城を奪還し、貞糺を追っている。
彼の耳に、天連が赴郡城を攻め落としたことは、聞こえているだろうか？
天連は片手を天に伸ばした。城門が開く。
敵軍が迫ってくる。ジッと堪え、貞糺を探す。
見えた、と天連は目を見開く。手を貞糺に向かって振るった。

「放て！」

号令で、弓兵隊が一斉に矢を放った。
まさか己の城がすでに敵の手に落ちていたとは知らない貞糺の軍は、その一撃で大きく乱れた。
緋鶯軍が貞糺軍に追い付く。
乱れた陣形では弓兵隊は使えない。天連は手綱を取った。

「出る」

呟くように言ったのだが、すぐ脇で返事が戻ってきた。

天連の同世代の従者、汽燕（きえん）だった。

「どうぞお気を付けください」

「お前も」

汽燕とは共に育ってきた。天連が初陣ならば、彼も同じだろう。

馬の腹を蹴る。馬は駆けだした。

▽▲

貞糺は逃げた。

よくぞあの状況でと感心する。1万以上の敵兵に取り囲まれていた。

赴郡に隣接した郡に、椎郡がある。貞糺はそこに逃げ込んだようである。

椎郡の太守は功郁という男だ。

貞糺とは親戚関係にある。貞糺の妻は功郁の妹だという。

「勝ちましたね」

汽燕が言った。　天連はホッと息を付いた。

「そのようだな」
「柢恵殿の策のおかげですね」
「……そうだな」

確かに賢いのだろう。
自分より一つ年上だというだけだ。それなのに、あの策。
天才なのかもしれない。
天連はハッとする。辺りを見回した。

「緋鶯は？　あいつは、どこだ？」
「殿なら、あそこに」

汽燕の指す方を見やれば、部将たちに囲まれている姿が見えた。
いつの間にか柢恵もそこにいた。
何か話している。報告でもしているのだろうか。
不意に緋鶯がこちらを見やった。目が合う。彼は薄く唇を開いた。
だが、言葉はなく、大股で近寄ってきた。

「何をしている？　こっちに来い。――怪我はないか？」

「……ない」
「見せてみろ」
「ないって」
「見せてみろ」

嫌がれば、相手だってムキになる。
力ずくで己の思い通りにしようとする。
緋鶯の手が天連の襟元に伸びた。天連はギョッとした。

「待て。ここで脱がせる気か！」

戦場である。辺りには死体が転がっている。
それらが自分たちを恨めしそうに見つめている気がした。

「気が済むまで見せてやるから、とにかく今は嫌だ！」

こんなところで、とんでもない、と言えば、緋鶯はようやく納得したようだった。
ふっ、と天連から手を放す。

「後で室に行く。好きな室を選んで良い。先に城内に行っていろ」
「でも。俺も後片付けを」
「お前は良い」
「でも……」

天連は言いよどみながら、辺りに視線を流した。兵は皆、死体を片付ける等、戦の後始末をしている。
それは上将である汐銚とて例外ではないのだから、一兵士である天連が免れるわけにはいかないだろう。たとえ、蒼夫人の身内で、青純血だとしても。
柢恵だって、部下に指示を出している。
緋鶯が気怠そうに息を漏らした。

「さっさと行け。躰を清め、休んでいろ」

片手を払う。天連を追い払うかのように。
そして、天連が何かを言い返す前に、汐銚の方へと去ってしまった。
仕方なく、天連は城門をくぐった。

天連の気配が去っていくのを背中で感じると、緋鶯は彼を振り返った。
ドキッとするほど、血だらけである。
五体満足で元気にいる様子から、ほとんどが返り血なのだろうと分かってはいるが、その血だらけの姿を自分の目に晒して欲しくな

かった。
部下に指示を出している汐銚の横まで来ると、緋鶯は己の顎を撫でた。
汐銚が振り向きもせずに言葉を発する。

「予想以上だな」

天連のことを言っているのだ、とすぐに分かった。
緋鶯は頷かずに、遠くの方を見やった。
柢恵が傷の手当てを受けていた。　斉郡城に火を放った時に火傷をしたらしい。

「柢恵の策が良かったのだろう」
「それもある。だが、天連の武がなければ柢恵の策は意味を為さなかった」

その通りだと、緋鶯も思った。
まず斉郡城で敵を敗らねば次の策は意味を無くす。
斉郡城には千しか兵を残さなかった。その千で三千を敗ったのだ。

そして、その後、天連はたった二百騎で赴郡城を落としたのだという。
――思った以上に、やる。
使える、と緋鶯は目を細めた。

▽▲

緋鶯が天連の房室にやって来た時、天連はすでに寝台の上だった。

夜更け近い。もう来ないだろうと思っていた。

なんだ、来たのか、と言えば、彼は当然だと笑う。

「見せてみろ」

手に例の薬を持っている。天連は躊躇無く夜着を脱ぎ捨てた。

――傷なんて無い。負った覚えなどないのだから。

そう思っていたが、知らないうちに付いている傷もあったようだ。

緋鶯はそれらを身体の隅々まで見やり、探し出す。

その執拗さに、天連はため息を付いた。

「ただの掠り傷だ。大したこと無い。怪我という怪我はしていない

はずだ」
「そのようだな……」

掠り傷に薬を塗り付けながら、緋鶯は言った。
伏せた目はどこか静かだ。

「だが、掠り傷を侮ってはならない。俺は掠り傷で死んだ者を知っている。戦場に連れて行かなければ、こんな心配無用だと思っていたが、まさか連れて行かないことで、こんな思いをするとはな」
「勝手に戦陣を開いた。悪い」
「いや。あの場合はああするしかなかっただろう。柢恵の決断は正しい。お前も良くやった。――だが、お前を連れて行けば良かったと後悔している」
「なら、二度と置いていくな。留守番は御免だ」
「……良いだろう」

今夜も共に休むつもりなのだろう。緋鶯が先に天連の寝台に横たわってしまう。
黙って、天連も寝転んだ。
瞼を閉じれば、赤が見えた。初めての戦に、休めた躰がいつまでも熱い。
ドクドク、と胸が高鳴っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0248w/

昊仰ぐ刻　君の蒼い翼

2011年10月7日13時46分発行